次郎は、ちよこ然と、月江の前に畏つて、
『お嬢様、あなたは其處で、何をベソ〳〵泣いて居たんですか』
『あら、何も泣いてなんか居やしないのに』
『だつて眼のふちが赤くなつて居るぢやありませんか』
かう、ぶツ切ら棒に詰問されて來ては、絹糸のやうに細い佳人の哀傷も、思はず、破顔せずには居られません。
その泣き笑ひの笑くぼを指さして、
『ほーら笑つて來た、今泣いた鴉がもう笑つた、おりんさん、お嬢様のごきげんが直つたよ』
其處へおりんも薄茶を一服立てゝ來て、
『やはりお前に限りますね。さ、お嬢様、次郎も歸つて來ましたから、お氣持を直して、また双六盤か投扇興でも』
と言ふのを、次郎はあわてゝ手を振つて、
『いや、おいらは今も云つた通り、今夜は遊んでは居られないよ。釘勘のをぢさんが來なければ、これから淺草まで急いで行つて、あの事を早く知らして來なければならない』
『あの事と言ふと、何なの？次郎』

月江も思はず彼の眼色につり込まれました。
そこで次郎が仔細を話す。次郎はその以前に釘勘や金吾の口から、お蝶のことを耳に挾んでゐて、暇あるごとに江戸見物に出歩くついでに、それとなく注意をしてゐたものと見えます。
偶然、彼はそれより數日前に、お蝶が狹い横丁から出て來る姿に行き逢ひました。然し、その後氣をつけてみると、まるで服裝が違つてゐるので、男か女かの判斷に迷ひながら、今日、濱町へ歸る率八に尾いてゆくお蝶を、またその後から尾けて行つて見たのでした。
そしてまた、この根岸の下屋敷に、千蛾老人が亡い後の月江を引取つたのは、萬太郎の計らひで、機を見て、彼が老人の生前に誓つた約束を果さうとする準備であるとも考へられるし、或は、この家族に金吾を協力させて、千蛾老人を殺害した仇を討たせんとする支度であるやうにも思はれる。
ともかく、月江はこゝに移されて、或る機運の巡轉を凝と待つ境遇に置かれてゐます。
然し、金吾からも萬太郎からも、この正月以來、さつぱり音も沙汰もない。
時折、釘勘が浮かない顏をして月江の樣子を見舞に來ますが、その釘勘にも、以後の消息はさらに窺ふべくもありません。——つまり夜光の短刀を繞るお蝶と日本左衛門とにからむ探索の手がかりも、渦紋がこの江戸表へ移つてから一層迷路の霧につゝまれてしまつた樣子で、さすがの目明し釘勘も、近頃はこの事件に匙投げ氣味になつたのではないかとさへ、他目には思はれました。

『來ないなあ、釘勘のをぢさんは――』と、次郎はしきりと待ち焦れて、
『もう來さうもないから、これから淺草の釘勘の家まで一走り行つて來よう。いゝでせうお孃樣』
と、再び庭へ下りかけます。
『もうだいぶ夜更けらしいから、明日にしては何うですね』
おりんが止めるのを、かぶりを振つて、すでに野槍を持ちながら、
『行つて參ります。遲くなつたら、泊まつて來るかも知れませんよ』
彼時代の元氣といふものは、自分にも他人にも抑止することを許しません。次郎は深夜の曙の里を、再びタツタと驅け出しました。
釘拔の勘次郎の手先部屋は、以前の京橋の御竹殿でありましたが、後に南の附屬となつてから淺草千束村の桐畑に移つてゐました。
その桐畑は觀音堂のお火除地で、葉のない坊主木が、霜明りの大地に骸骨を植ゑたやうに冴え返つてゐる。
僧院のものらしい法衣の人達が、提燈をさげて行くのを追ひ越して、やがて次郎は、荒格子を戸閉した一軒の家の前に立ち、
『今晩は。――今晩は』

勢ひよく、其家の表を叩き初めました。
訪れてみますと、折角彼が不眠で告げに來た甲斐もなく、
『どちら樣ですか。もう寢んでをりますが』
と、よそ〳〵しい女の返辭が奥の方でするばかりで、釘勘の家の戸は、彼へ冷淡に閉まつて居る儘です。
でも、次郎はなほ其家をたゝく手を止めないで、
『こんばんは。今晩は。――こゝを開けて下さい。私は根岸の方からやつて參りました高麗村の次郎といふもんでございますが……』
『今晩は生憎と、部屋の衆はみな留守で一人もをりませんから、また明日來て下さいな』
『いえ、部屋の者は留守でも、釘勘親方にさへ會つて、たつた一ことお話すれば用は濟むんですから、どうぞ、ちよつと此戸を開けてをぢさんに取次いでくれませんか』
さう言つて居る間に、奥の方でする女の聲は、一向立つて來さうもなく灯影も射して參りません。
『お氣の毒樣だけれど、その親方もこの四五日の間、ちッとも家へ顏を見せないんだから、また出直して來て貰ふより爲方がないねえ』

『困つたなあ』
次郎はさう呟いて、また奥へも聞こえるやうな聲で、
『困つたなあ、そいつは』と繰り返しながら、いつ迄もそこに嘆嗟を洩らして居ました。そして、もう先では歸つたものと思つてゐる時分にまた戸をたゝいて、
『もし〳〵、それでは、釘勘親方が歸つて來るまで泊まらして貰ひますが、何處から這入つたらようございませうか』
内と外で、なほ二三度押問答をして居りましたが、遂々、根氣負けがしたやうに、
『私は留守居の者で、何の御用事か知らないけれど、ぢやあ裏の方へ廻つてごらん』
と、見當違ひな方で、やつと雨戸を開ける音がします。
次郎は家の横を廻つて、裏口の明りを目あてに近寄つて行きました。見ると、ことばの通り、もう戸締りをして寢て居たものに相違ありません、髪をぞんざい結びにした廿四五の肌の白い女が、二戸ほど開けた戸の際に妖冶な姿を細長く見せてゐて、
『泊まつて待つて居ると言つても、親方は何時歸るか分りませんよ。何しろ、商賣がらだからね』
『でも、爲方がありません』
『それに私は、此家の家内でもなし雇ひ人でもなしするから、滅多な者を、泊めていゝか悪いのかも

分らないんだよ』
『決して、御心配には及びません、私が參つたのは初めてですが、釘勘親方とはとうから御懇意で、根岸のお下屋敷へは、時々訪ねて下さいます』
『根岸のお屋敷だつて？』
『はい、前には徳川萬太郎樣が押し込められてゐた窮命屋敷で、先頃からそこに御厄介になつてゐる狛家の召使次郎と申す者でございます。或る急な事をお知らせしたいと、わざ〳〵そこから飛んで來たんですから、お留守なら歸るまで待たして置いてくれませんか』
『何か知らないが、ぢや寒いから、内へ上つて居るがよい』
『どうも有難うございます。こゝから上つてもようございますか』
『今、雜巾を上げるから、それで足を拭いて上つておいで』
『折角、お寢みの所をすみません』
『さ、こゝへ置くよ、雜巾を』
『はい、はい』
『そして、眞つ暗だから、ちよつと其處に待つておいで、今、明りを持つて來て、部屋へ案内して上げるから……』と、緣座敷の障子を開けて、奥に細く灯つてゐる丸行燈の燈芯をかき立て、それを左

にさげながら、寢卷の小褄を取つてスル〳〵と出て來ました。

淵い灯影の輪が、女の白い腮から面長な顏を逆さまに撫でて、暗い天井を海月のやうにふわ〳〵とうごいて來る。
すると、次郎は初めて愕然として、
『やつ、おめえは熱海で逢つたことのある、江戸のお粂さんといふ女ぢやないか』
明りを提げた凄艶な寢卷すがたへ、目をみはつて叫びました。
意外です。それは紛れもなく、熱海の隱居藤屋に泊つてゐた丹頂のお粂に相違ありません。
けだし次郎ならずとも、お粂の素性を知る者ならば、彼女が今かうして、目明しの家に留守居をしてゐるなどといふ事は、有り得べからざるものと否定して、信じないかも分らない。
然し、事實はどこ迄も事實で、
『おや、それぢやお前は、あの時、何處とかいふ御大家のお嬢さんに追いてゐたお供だつたのかえ』
と、彼女もひとしく驚いた顏をした樣子を見ますと、それは他人の空似ではなく、やはり丹頂のお粂であります。
『それぢや萬更知らない仲でもなかつたね。さあ、早く後ろを閉めて、此つ方へ這入つたがよい』
お粂は親切に、火鉢に火を取つて與へたり、寢るべき夜具を押入れから出して、自分も再び寢間へはいつて、そこの明りを消しました。
『變だなあ、あのお粂といふのは、金吾樣をたぶらかして居た女賊だといふ話を聞いてゐたけれど、何うして、釘勘のをぢさんの家に隱れて居るのだらう？　目明しのおぢさんが、そんな惡黨の女を匿つてゐていゝものかしら』
次郎はもつとお粂と話を交してみたいと思つたのですが、彼女がそれを避けるやうに、すぐ明りを消して寢てしまつたので、自分も寢るよりほかはありません。
で、疲れた足を蒲團の中にのばしながら、その疑惑に、寢入りばなの空想を囚はれてをりましたが、いつか、邪氣のない高鼾をかいて、ぐつすりと寢込んでしまつた樣子です。
と――同じやうに、お粂もさま〴〵な考へに迷つたことでせう。
どうしてあの高麗村の次郎が、根岸の下屋敷に居るのか？　また、何の急用をおびて此家へ來たのだらうか？
いや、それよりも、彼女とすれば、すでにかういふ境遇に措かれて在る自分自身の現在からが、前から大きな疑問なのです。
去年の夏――

彼女の眼の先には、青い螢のやうなものが明滅して見えてくる。

うま〳〵と秦野屋に誘ひ出されて、あの甲府の信玄堤の畷で、突然、相良金吾に出會つた時、どういふ氣持か後では自分でも分らない心理ではあつたが、帶の間に秘めてゐた魔藥を自分の顏に浴びて、死なうとしたお粂です。

彼女は、さうして自殺を果したものとのみ思つてゐました。……所が、誰かに介抱されて氣がついてみると、おのれの身は柳澤家の町方役所の假牢に、牢醫の手當を受けてゐた。

吐き氣をつゞけて、半日ほどは苦しみましたが、解毒を服まされて體が癒ると、猶豫なく、おきまりの軍鷄籠に乘せられて、甲府表から江戸町奉行へ差立てになり、阿彌陀街道から笹子、小佛を搖られて來ました。

三尺高い獄門の臺が、もうお粂の目には近づいて居たのです。彼女も、相應な覺悟はきめて、軍鷄籠の中では頗る神妙に返つてをりましたが、夜中、江戸表へ着いたと思ふと、意外にも、自分はこの觀音堂裏の桐畑の家に運ばれて、

『そのうちに吟味があるかも知れないが、暫く養生をするがいゝ』

と、釘勘に言ひ渡されて、夢とも謎とも考へつかない數ケ月を此家に送つて居たものであります。

洗へば、凶狀の多い自分の體を、町奉行から公然と、そんな寛大な起居をゆるされるはずもないし、

第一、外出がちな釘勘が今夜のやうに留守な例は屢々ですから、逃げようとすれば何時なん刻でも逃げられないといふ事もない。

けれど、人間何日でも逃げ得られる境遇からは、逃げようとする衝動も起らないし、また、何うして釘勘が自分をかうして置くのかといふ疑問も、お粂の心を一日のばしに此の家に引き留めて、ついつい、立去る氣持も起させません。

淺春艶語

枕元で、釘勘らしい聲がしたので、次郎がふと眼をさましてみますと、陽は三竿、すでに翌日の午近い刻限です。

『あ……おぢさん』

『何うしたい？　次郎』

『寢坊しちやツた、お歸んなさい』

『鼻から提灯を出して居たぜ、隨分よく寢て居たやうだな』と、彼は次郎の寢ぼけ眼を笑ひながら、今外から歸つて來たばかりらしく、羽織を壁にかけて火鉢の前に坐り込んでゐます。

『おぢさん、急用があるんだぜ、今話すから待つてゐてお呉れ』

次郎はその間に、元氣よく、夜具を押入の中へまるめ込むと、流し元へ走り出して、ほんの眞似事だけに顏を洗つて來て、

『何と言つたッけ……さう〳〵お蝶だ、切支丹屋敷のお蝶といふ女だ』

『それが何うかしたと言ふのか？』

『おぢさんはあの娘を、去年から血眼で探し歩いて居るんぢやないか』

『おめえも小耳に挾んで居たらうが、お蝶と日本左衛門の隱れた先が、皆目知れないので弱つて居るのだ』

『所がそのお蝶に、おいらが昨日出會つたんだよ。それで、もう夜半だつたけれど、此處まで急いで知らせに來た所が、部屋の者もおぢさんも留守なのでガツカリして寢てしまつたのさ』

『ほんとうか、次郎』

『ウソなんか言ふものか』

『そいつが眞實なら有難い話だが』

『お蝶ばかりでなく、おぢさんが今言つた日本左衛門の隱れ家も、おいらはちやんと突き止めて來てゐるよ』

『えつ……』と、釘勘も目明しの本業をこの少年に出し抜かれた驚きよりも、意外な吉報に思はず膝を立てゝ、彼がつぶさに話すところの率八の家の位置や、そこに現れた覆面異装のお蝶の行動を物靜かに聞き取つてゐました。

やがて、茶簞笥をかき廻して、有合せの菜で茶漬をかツ込むと、

『ぢやあ、すぐに手配にかゝるとしよう』

羽織を着直して外へ出ました。

次郎も捕手の仲間に加はる氣か何かで、例の野槍をたづさへて、彼と共に飛び出しましたが、桐畑から千束の用水堀まで驅けて來ると、

『おつと、お前はこの邊で待つて居てくんな』

と、逸る足を止められて、

『七刻頃になると、上野の方から一人、茶屋町の方から一人、草履ばきで、十手を持つた男が來るだらう。それはおれの部屋に冷や飯を食つてゐる岡ツ引だから、訊いてみて、もしさうだつたら、灯ともし頃を合圖に、大川と濱町の陸から、例の所へ人數をよこすように親方が言ひ殘して行きましたと、言傳をしてくれないか。――でその時には、御苦勞でも、お前がそこへ案内をして來て呉れゝばなほ有難いが』

無論、次郎に否やはありません。
『承知いたしました』
『ちゃ頼んだよ』
『あ。――親方々々』
『なんだい？』
『その時は、おいらも捕手と一緒になつて濱町へ行くよ。ちやうど明りの灯く時分に』
『うまく此ッ方の方寸どほりに行くか何うか、とにかく、部屋の者に、上手にやれと言つてくんな』
次郎をそこに止めて置いて、釘勘は大股に何處ともなく立去りました。
『あ。……忘れた』
後姿を見送つて、用水堀のふちにぽつねんと立つてゐた次郎は、その後で、何か悔むやうにかう呟きました。
『忘れた、忘れた。……自分の教へる事ばかり喋舌つて居て、ツイ、ゆふべから訊かうと思つてゐたお粂の事をたづねてみるのを忘れてしまつた』
霜解けの千束村の畦を、梅の枝を持つて通る人や、のろ〳〵と歩む空駕の人影がいかにも春先の點景らしく、うら〻かに動いて見えます。

紙漉職人の働いてゐる紙干場の原の手前で、一つの駕が止まりました。
『おい、すてきもねえ美女が通るぜ。天降りでなくて、駕降りの天女だ』
『ほウ、成程、こいつは素晴らしい眼の保養だ』
『何處へ行くんだらう。行く先が氣にかゝる』
『あれ、溝に添つて大川の方へ歩いたぜ。あの流れが越せないで、橋を探して居るんぢやねえかしら、それなら手を取つて渡してやりたいものだが』
などと干場の紙漉職人が仕事の手をやめて騒いで居る彼方を見ますと、今、小川の縁で駕を捨てた押絵のやうな娘が、その聲に顔を反向けて、小川の水際を大川河岸の方へ、朱塗の木履を轉ばせて行きます。
と――其處から小牛町、
『あ。お蝶さんで』
その流れの水に屈み込んで、目笊に摘み入れてゐた芹の根を洗つてゐたお人好しの率八が、木履の裾を見上げて聲をかける。
『あら、今日は』

と、お蝶が此ッ方の岸から笑ひ返すと、率八は腰をのばして、
『見違えちまッた――今日は馬鹿に綺麗にお化粧して、それに、素晴しいおめかしぢやありませんか。それぢやまるで、瀬川路考大家のお嬢様のやうですよ。そこで、どちらへ？』
『あの……お前のうちに居る人へ、少し用があつて來たんだけれど』
『親分も、お蝶が來たら起して呉れと言つてゐました』
『ぢや、ゆふべ書いて置いた物を、讀んでくれたのね』
『とに角、此ッ方へお渡りなさい』
『あら、怖い……』
二間ばかりの小川の丸木橋を、操つりのお染のやうに、怖々と木履で越えて來る娘らしさは、前の夜の男裝覆面の彼女とは何うしても同一人とは思はれません。
『親分、來ましたよ』
率八に搖り起されて、眼をさました日本左衛門も、今まで幾度となく見たお蝶よりも、今日のお蝶の思ひ切つた濃艶なおめかしに、思はず眼を奪はれて、
『おう、上るがいゝ』とは言つたものゝ、殺風景の納屋の隱れ家に、多少テレない譯には行きません。
『どうぞ、ごゆるりと』

率八が出て行かうとすると、
『おい』
『何か御用で？』
『面倒だらうが、あとで酒の支度をしておいて呉れ。それと、ぬかりは無からうが、納屋のまはりを時折見張つて居るやうにな』
『よろしうございます。安心して、お話なさいまし』
どんと、戸を閉められると、納屋の中の光線は、わづかに明り取の切窓一つで、お蝶の絢爛も日本左衛門の姿も、程よく室内にぼかされて二人の氣持も落着いて來る。
――まづ何から話さうか。
彼と彼女の間に、或る心の經過があつたとしても、茶屋町の四ッ目屋の歸りからずつと今日まで、彼が追へばのがれ、彼が追れば蛇の如く忌んで逃げてゐたお蝶が、自分からこゝへ來てから眞向きに坐る氣持は、何としても、唐突で、には かに言葉の緒口が見つからない。
が――さういふ時には、女にはモジ〳〵して居るといふ受身の姿態が助けます。お蝶もそこで、娘らしい羞恥みを作つて、男の言ひ出す聲を待つばかりでした。
『……』

けれど日本左衛門も暫くは無言で、彼女の襟脚を眺めながら、彼女の心を讀まうとするもの丶如き眼さしであります。

外では率八が、見張りの眼を光らしながら、酒の肴にしようとして、そこらの枯れ草で有合せの蛤でも燒いて居るものとみえ、明り取の窓からその煙と、かうばしい汐の燒ける匂ひがぷんと流れて來る……。

暫くの間、ひそかだつた納屋の中で、やがて男女の低い囁き——

『お蝶。それに僞りはあるまいな』

日本左衛門の低いうちにも力のある言葉です。

『考へてみると私ほど、世の中に頼りの薄いものはありませんもの……。いつかの晩、鼻寺の暗やみで、女房になれと、あなたに言はれた時は、たゞ怖い一心でしたが、後になつてみると、ほんとに自分の生涯を托すお方は、あなたより他にない事が分りました』

『さうだらう、お前は切支丹屋敷を脱出した、ころびばてれんの娘だ。お前を容れる世間は無く、お前を狙け廻す宗門役人があるばかりだ』

『ほんとに私はその通りなの。今日は駕で來ましたけれど、外へ出るには、油斷も隙もならないので、

男姿で役人の目を晦ましてゐる位なんです。……可哀さうな女だと思つて下さい』

『おれも孤獨だ。孤獨のおれはさういふ薄命な女をいつも心でさがして居るらしい』

『ぢや今でも、鼻寺で言つたことばに變りはないのでございますね』

『あのお条に裏切られた後は、一層、愛といふものに飢ゑて、孤獨なおれは、しきりと戀の相手を探して居たが、おれは常に運命の尺前に、十手と獄門臺を見てゐる大盜だ。所詮、人情の溫か味にめぐまれる日はないものと、淋しい覺悟を待つてゐたが……』

『私の惱みと似てをりますのね』

『お前といふものが何日かそれに選ばれたのだ』

『ほんとに嬉しうございます』

『女房になれ』

お蝶の腕を寄せて、その肩を抱へました。

『なりますわ。何日までも、屹度……』と、引寄せられたまゝ、抱擁の力を求めるやうに媚の溢るゝ目をあげて男の顏を見上げました。

『親分、何にもありませんが』

と、そこへ率八の聲がして、戸口から射し込む光線の中に、酒と膳とを運んで來た彼の姿が立ちま

した。

『お蝶さん、此處へ置いて行きますから、お酌は宜しく頼みますよ』

『あい』と、彼女はいそ〳〵と受けて、

『まあ、なか〳〵御馳走が』

『率八も可愛い奴、あいつだけは、早く足を洗はして、矢來の中の往生はさせたくねえものだ』

お蝶は、彼の杯へ一つ酌いで、

『私も死ぬのはいやですわ』

『それや誰だつてさうに違ひねえが、人間には、何の力も及ばぬ運命がある』

『どんな運命が向つて來ても、私は屹度生きて拔けます』

『お前は、おれより氣が強さうだな』

『弱い氣持では、とてもこの世間に、生き通して行けませんもの。それに、あなたといふ人があれば、一層私は氣を強くして、少しでも永くこの世に居てみたいと思ひます』

さう言ひながら二人共に、何となく、寸前の運命に儚い豫感を持ち合つて居るらしく、酒にも深く醉へませんでしたが、思慕の情はかへつて濃密な氣持を雙方に起させました。

『おう、暮れて來た』

日本左衛門はふと切窓の夕星を見て、何かにはかに氣を急かれて來たらしく、

『夜になると、出かけなければならない用事があるんだが……お蝶、また折を見て訪ねて來て呉れ』

今日の首尾を惜みながら、お蝶も夜になると切支丹屋敷にゐるヨハンの姿が目に見えて來て、凝と落着いてゐられない氣持に急かれて來るのでした。

『ぢや、またそのうちに』

と眼で誓つて、彼女が先に男のそばを立つた時です。――慌たゞしい率八の跫音が、どゞゞゞツと來て納屋の外へ突かつたかと思ひますと、

『親分ッ、手が廻つた！』

と扉に火のついたやうな彼の絶叫であります。

さてはと、さすがに胸をギクとさせて、男女が顔を見合せたまゝ佇立んで居ますと、途端に、そこの戸を開けた率八が、

『親分、今のうちです、早く刑の方へ』

と顏色もなく、舌をふるはせて急き立てました。

――と共に、飛鳥のやうに外へ走らうとするお蝶を後ろに制して、

『騒ぐな。捕手か』
『え、そんなあんばいです。最前からこの邊へ、うさん臭い男がウロついて居ましたので、蟬あにも油斷をするなと言つて居ますと、案の定、向ふの紙漉場へ人數が集まつて、何時のまにか八方を寒いでしまつた樣子です。もう逃げ口は、大川よりほかにはございません』
『よし、よし。それ位の事は豫ての覺悟だ』
『だが私は何うしたらいゝのかしら？……』
『案じる事はない。率八の言ふとほり、八方は捕手の遠卷、滅多に駈け出しては、かへつて危なからう』
『さうです、愚圖々々して居ると一大事ですよ。……さ親分、お蝶さんも、早くこゝを』
『とに角、おれと一緒に舟へ乘るさ』
『あゝ、それなら私も氣が強いわ』
男の腕にすがり付いて、お蝶が外の夕暗をのぞくと共に率八は、大川の洲へ走り出して、猪牙舟の小べりに寢てゐる櫓柄を取り上げて居ます。
今だ！　と直覺したので、男女がそれへ目がけて疾風のやうに驅け出した時は、すでにその逃げ口にも、危機のワナが懸つて居ました。――走り出して七八間、あッと筒拔けの聲が夕暗を流れたかと

思ふと、男女の姿は、地に張られてゐた一本の繩に諸足を拐はれて、
『しまッた！』
と叫びざま、左右へ離れてのめりました。
耳をつンざく呼子笛の音が、一息のうちに律を刻んで四方へ響きを傳へますと、相手の足をすくツた繩の左端から、
『日本左衛門、御用』
と呼んだのは、まぎれもない釘勘のどす聲であり、同時に繩の右端から、
『お蝶、待てッ』
と野槍を持つて躍り立つた人影があります。それはこゝに捕手を導いて來た高麗村の怪童次郎に相違ありません。
次郎が鋭い勢ひをつけて、お蝶へ野槍を向けて來たのを見ると、率八は驚きながら、有合ふ舟の鉤棒を持つて、
『お蝶さん、舟へ、舟へ』
と、おのれが代つて彼の相手に立ちました。
突嗟、あぶなかつたのは釘勘の頭蓋骨でした。呼子笛を口から放した途端に、鬼神のごとく怒つた

日本左衛門が、身を跳めかせた反動を拔き打にかざした長船の大刀に乘せて、

『釘拔き。まだ生きてゐたかッ』

と、飛躍と共に、斬り下げて來たのです。

何の尺二三寸の十手がそれを支へ得ませう。ガツキと受けたら長船の刄にこぼれて飛んだかも分りませんが、その代りには釘勘の腦骨がたしかに二つに割れたでせう。

元々、目明しや捕手などは、武藝をほこる武藝者ではありませんから、どう穢い逃げ方をしようが、逆トンボを打たうが、要は、怪我をしないに限ります。そこでこんな場合に、その切ッ先に當つて行くやうな愚な目明しはありません。

『おッと！あぶねえ』

ひらりと横ッ飛びに逃げ退いた釘勘は、所詮、手元に近づき難いものと見て、十手を口に預けるが早いか、前の捕縄を輪に手繰つて、その分銅の先を、鶴嘴の尾のやうに微かに振りながら、機を見て居ます。

が然し、日本左衛門は二度とは寄つて來ませんでした。

彼は片手の長船を少しづつ手元に納めて、一歩々々に後退がりにお蝶のそばへ寄つて行きますと、

『慌てることはねえ。日本左衛門が付いてゐる』

囁きながら、彼女の手首を右腕の脇へ抱き込みました。そして、片手の切ッ先は、いつか、釘勘と次郎の野槍へ等分な注意を配りつゝ、なほジリ〳〵と川波の白い洲の方へ退がッて行くのです。

そのうしろには、猪牙舟がある。

然しその時――深川河岸の方からと永代の川番所の方から、紺色に黑ずんだ宵の大川に灯をかざして、早くも漕ぎ迫ッて來る幾艘かの櫓聲がします。無論、釘勘の手配による捕手を乘せた小舟でせう。

けれどまた不思議なのは、紙干場の原やその邊の小屋の蔭に、合圖を待つてゐる人數です。

今の呼子笛が聞こえないはずもなく、次郎と釘勘が苦闘に陷ちて、すでに長蛇を逸しさうに見えるこの場合になつても、何處からも、一人も駈け寄つて來ないといふのは何とも合點が行きません。

その癖、彼方の紙漉小屋の附近では、何かわめき合ふ聲も聞こえ、亂れ飛ぶ提灯の影もたゞ事ならず見えますのに――。

恰度その前後に、葛蒲河岸から濱町附近の露路を流して來た二人連れの虚無僧がある。

ちらと、笠の裡をのぞいた岡ッ引がそれを認めて、

『やつ、雲霧と四ツ目屋だ！』

折から張込んでゐた捕方にそれを傳へたから堪まりません。

彼方の納屋で合圖があつたら一度に動き出す手配をして、幾段にも構へてゐる捕手の伏勢が、何氣なくその危地へ懸つて來た虚無僧の二人をつゝんで、

『それッ』と、聲を揚てしまひました。

不意を衝たれてギョッとした虚無僧が、『何をッ』と天蓋をハネたのを機ッかけにして、一本の白刃へ向つて集まる十手の疾風が、まづ紙漉場の裏あたりから凄まじい亂戟の渦紋を起して、遂にそれから間もなく彼方の納屋の前で、釘勘がけたゝましく吹いた呼子笛の音にも、手を分けて駈け向ふ事ができなかつたのであります。

驚いたのは、雲霧と四ツ目屋でせう。

二人は、この遭難を偶然とは思ひません。

江戸表へはいり込んで以來、僞普化僧の姿で、暫くうるさい岡ッ引の眼から離れたものと安心してゐた矢先ですから、當然、自分達を待ちうけて張られてゐた捕手の網と思つたらしく、自暴と狼狽と死に物狂ひとで、寄りつく人數を滅茶苦茶に叩き斬ッてあばれ廻る。

この向ふ見ずな二人には、多勢の捕手もスッカリ手を焼いた形で彼方の川洲、此方の露路、或は狹い横丁から濱町の屋敷地にまで引き摺り廻された揚句、果ては組々の人數もちりぐゝになつて、遂々どこかへ取逃がしたのは、諦らめられない忌々しさでせう。

その頃はもう、とつぷりと陽が暮て、大川を隔てた深川の屋根の上から、黄色い宵月が顔を出してゐます。

その反映が箱崎川の枝河にまで射し込んで、脚の高い女橋の杭の裏まで仄明るく見えたかと思ひますと、守宮のやうに、橋の裏に取ッ付いてゐた二人の男が、

『驚いたなあ、雲霧』

『まつたく不意を食らはしやアがつた。前から氣振でもあれば、少しは覺悟のしやうもあるのに』

『何うだらう、もうボツ〳〵出かけて見ようぢやねえか』

こんな事を言ひ合つてゐたかと思ひますと、杭を傳はつて、石垣から、橋の袂へそつと顔を出して、

『いゝか？』

『可し』と一方に眼くばせしながら、ひらりと陸へ飛び上りました。

『困つたなあ、天蓋を吹ッ飛ばしてしまつた』

『おれは尺八を何處かへ落してしまつたぜ』

『どうせ僞物だから爲方がねえや』

『おい、待ちねえ。……誰か向ふから驅けて來やがつた』

『成程……だが犬ぢやねえやうだが』

『何處かで見たやうな男だぜ』
『誰か探して居るんぢやねえか。ふら〳〵しながら此つ方へ來る』
枯れ柳の蔭に身を交して、通る男をやり過ごさうと見て居ると、それは、少し度を失つた樣子で、眼色を變へてよろけて來たお人好しの率八でした。
四ツ目屋の新助は吃驚して、
『やつ、あいつあ率八だ。オイ、率八ぢやねえか。率八、率八』
呼び止める聲に、駈けて來て、
『おつ……四ツ目屋の』
『叱ツ……』
『オ、雲霧の兄哥もこゝに……』
『部かにしろツて言ふのに、わからねえ奴だ、どうしたんだその態は?』
肩を叩かれてさう訊かれると、率八は、クスツと一つ肩でしやくり上げて、遂にワツと手放しで泣き出しました。
新助と仁三は驚いたり慌てたりして、
『やい〳〵やい。泣く奴があるか、泣くやつが?』

こんな所へ捕手でも來られては――と四邊を見廻して、大急ぎで、率八を柳の下に蹲居み込ませる。
『ばか野郎め。大きなりをしやがつて、人の面を見る途端に、ベソをかく奴があるものか。泣いて居たんぢや話が分らねえや　一體何が何うしたんだ、ハツキリと口を利きやアがれ』
可笑くもあるが實際腹も立つて、思はず雲霧が怒鳴りつけました。
雲霧に叱られて、率八はやつと泣き默りました。そして、話すのではなく、訴へるが如く言ふのを聞き取ると、四ツ目屋と彼は顏を見合つて、
『それぢや親分は、お蝶と一つ舟で大川へ逃げたと言ふのか。なんのこつた、おれ達は足を棒にして探してゐると言へば、飛んだ道行と洒落てゐたんだぜ』
『そんな親分ぢやなかつたが、鼻寺以來、お蝶に少しどうかしてゐるな』
『何しろ率八がいゝ災難だ』
『可哀さうに、てめえを捨てゝ、お蝶を連れて逃げた親分の心が、おれは憎い』
憮然として、不平を言葉に鳴らしました。
『兎に角、落ちた先を探さうぢやねえか』
『親分のか?』

『さうよ』
『また、お手輕にや分るめえぜ。甲州でドヂを踏んでから、仲間の聯絡も支離滅裂だ』
『その心棒になる親分が、眼色の異つた小娘の擒人になつてしまつたんだから、戰にすりや散々な敗北だな』
親分が惡く言はれるのを、率八は辛い顏をして聞いてをりましたが、その儘にして置くと、何處まで辛辣になるか知れないので、
『ねえ、四ツ目屋の兄哥、親分に會はうと思へば、何時でもぢきに會はれますぜ』
二人の間へ、横から顏を伸ばして言ふ。
『ふウむ、何處で？』
『お茶の水の底へ降りて、夜になるのを待つてゐれば、きつと親分がやつて來ます、今日まで毎晩、そこへ行く事を欠かした事はありません』
『何しに行くんだ、そんな所へ』
『何しに行くのか、俺にも分らねえが、毎晩舟で送つて行くと、あの谷間にある洞穴へはいつて行きます。そして、歸つて來るのは明け方なんで』
『へえ、そいつは初めて耳にした』

『だけれど、親分も今夜からは、俺が居ないで不自由だらうな。きつと暫くは、そこへ行くのも止めるかも分らない』
『何しろ、そのうちに、折を見て一つ行つて見ようぢやねえか。その時は、案内だぜ』
二人に尾いて歩きながらも、率八はうろ〳〵と後ろばかり振返つてゐる。逃げるからには、人通りのない方へ行くのだらうと考へてゐた彼の想像は違つて、雲霧と四ツ目屋は、鐙の渡舟から茅場町まで一息に急いで、それから先の緣日の人混みに交ると、初めて足を緩めました。
『おい率八、空き腹だらう、食ひたい物は何がいゝ？』
『有りません、澤山です』
『意氣地のねえ奴だ、元氣を出せ』
『緣日を歩いてゐると、みんな女房や子供を連れて、樂しさうに歩いてゐますね』
『盜ツ人がそんな事に氣を取られて居るやうぢや脈はねえ。率八、惡くすると、てめえは近いうちに獄門へ顎を乘せさうだぞ』
『な、なぜですか』
『いやに哀れツぽい聲を出しやあがつて、佛心が有り過るもの』
『これでも隨分我慢をして居るつもりなんで……實アさつきから、蟒アや餓鬼がどうしたらうかと、

それが心配で、足が前へ進みません』
『さう〳〵、てめえには、女房子が有つたんだつけな。第一、よろしくねえ男だ、泥棒のくせにして、女房を持つたり子をでかす奴があるものか』
『こんなつもりで持つたんぢやありません。そのうちに子が出來て、食へなくなつたから、始めたんです』
『そして、てめえの罪が、女房子にかゝつて行けば、元々になるぢやねえか。そんなに案じられるなら、もう一度後へ戻つて、見屆けて來い。その代り、すぐ捕まるぞ』
『お、おどかしちや、いけません』
『はゝゝゝゝ。此奴をからかツてゐると限りがねえ。どれ、飯でも食はうか』
藥師の横丁をのぞくと、菜飯、奈良茶飯、木の芽田樂、蒲燒など、軒並びの八間が團扇をハタかせて、春の淡雪のやうな灰を綺麗な火の粉を流れる往來へ叩いてをります。

梅香鬼

朝飯前に百射の弓と半刻のそゞろ歩きは、若い新將軍の習慣となつてゐました。

今朝も的場で一汗しぼつて、本丸の道灌堀からお駕籠の附近へ、早咲きの梅を見ながら歩いて來た吉宗、どつい木綿の平服に結城の袴をつけ、
『源次郎、そちの歩き方を見ると、まるで締まりがないぞ。それだから弓も劍道も上達しない筈ぢや』
從いてゐる小姓番の松平源次郎に、元氣よく話しながら戻つて來ます。
『左樣でございませうか。然しお上の歩き方もべつに變つた所はないやうに存じますが』
『いや、わしには心得がある。屋内では禪坐、戸外では歩心、一歩でも、不用意には歩いてをらん。それに引かへて、そちの足は、體を前に出す爲にしか動いてをらぬ』
『元々、足を動かすのは、體を前に出す爲のものと心得ますが』
『いや、足は體を運ぶ道具だけではいけない。世の中を踏み上げてゆく心がなくては』
『難かしうございますな、考へまするとどう歩いてよいのか、分らなくなりました』
『不及先生の歩術でも習へ』
『歩術、はゝあ、どこかで承はりました』
『屋内禪坐、戸外歩心、兩道を合せて味はふとなか〳〵面白い。おゝ、咲いたな、梅が』
『この附近は、南向のせいか、早咲きにございますが、吹上の方のは、まだつぼみも固うございませう』

『錦霜軒の臥龍梅もまだ早いかな？』
『あれは、わけても遅い方で』
『お、錦霜軒で思ひ出したが――』と吉宗はふと足を止めて、『黒鍬の小早川剛兵衛はその邊に見當らぬか』
『お召とあらば、見て參りませう。近頃、山吹のお茶屋の手入にかゝつてをります故、あの附近に居るかと存じます』
庭を駈け出した源次郎は、やがて黒鍬の組頭剛兵衛を連れて戻つて來ました。時ならぬ場所で、不意の召に、剛兵衛は何事かと、吉宗の前にひさまづき、
『何ぞ、お庭の手入に、悪い所でも、お目に觸れましてござりませうか』
と、畏る〳〵顏色を仰ぎ見る。
『さういふ咎め立てをするのではない』
と、吉宗はまづ古參の老庭師が心配顏を安堵させて、
『呼んだのはほかでもないが、過日、そちが案内に立つて吹上へ參つた尾州の萬太郎の事ぢや』
『おう、あのお力の事でござりますか。それに就て、剛兵衛からも、いつぞや、お側衆まで申上げておきましたが、お上のお耳には』

『いや、何も聞いてをらぬ。尾州家の氣儘者故、誰も、なるべく噂を避けてゐるのであらう。――所でその後、彼は如何いたしてゐるな』
『相變らずにござります』
『相變らずと言ふと？』
『錦霜軒で寢てばかりおいで遊ばします』
『江戸城の庭が拜見したいなどとは、元々、口から出任せの口實と思ふたが、寢てばかりゐるとは、合點がゆかぬ』
『時折、あの前を通りまして、それとなく聲をかけてみまするが、いつも、御家來金吾樣と共に、戸を閉した限りでございます。そうかと思ふと、夜中錦霜軒に灯りを見る事などもあり、未明に煙りをあげてゐる時などもございます。吹上は、火氣嚴禁のお定め、それとなく、御注意申したくは存じますが、何せい、御三家の若殿、剛兵衛直々には恐れ多い儀と、その由、お側衆にまで申し上げておきました次第でございます』
『そりや無益ぢや。近習の中にも、萬太郎へ苦言をするほど勇氣のあるものはあるまい。よし、よし。そのうちに、吉宗自身から申してくれよう』
なほ二三、萬太郎の行動について、剛兵衛に問ひ糺した吉宗は、しきりと、小首を傾げながら、講

書の時刻、書院の方へ足を向けてゆく。

その頃から、妙なうはさを、吉宗はちら〳〵耳に入れました。

深夜、船見山の方角に怪し火が走つた。また曰く、大奥の女中達七八人吹上の梅林に暮て歸ると幽鬼に出會つて氣を失つた。また曰くです、四更の頃になると作兵衛瀧の鳴が止まつて陰々たる人の囁きが聞こえる事があると。

そんな噂の出所は何時も長局ときまつてゐて、さすがに、表方では眞顏にうける者もないが、大奥の夜ものがたりでは、專らそれに尾ヒレを付けて、遂には、御中臈などの口を經て吉宗の耳にもはいつて來るものとみえます。

もつとも大奥にこんな噂の立つことは、珍しいことではありません。大奥と怪力亂神とはつきものです。華美豪奢をつくしてゐる彼女たちの生活も、女ばかりの國はどことなく陰氣で、常に妖說が信じられる。

然し、それを聞くと、吉宗も信じました。

無論、口では笑つて居たでせうが、心の裡では、

（萬太郎だな）と、有るべき事とうなづいたのです。

その萬太郎の所爲にしても、彼には二樣の解釋がある。一つは、ちやうど自分と同じ三家の嫡子にあつた彼が、天下の大統を享けて將軍に坐つた自分に對して一種のそねみと反感を持ち、新將軍の代がはり早々何かこの江戸城に不吉な妖兆を起さうとする故意な惡戲であること。

また一つは、別な目的をもつて、錦霜軒に起伏しながら夜中何かの策動をやつて居るのであらうといふ想像。

そのいづれか一つに違ひないと見たのが吉宗の信ずる所でありましたが、將軍繼承問題では、水戸とも暗鬪があつた所なのに、繼職早々、また〳〵尾州家と確執を起すのは苦しい事であり、水戸派、尾州派の諸臣に對しても面白くない成行を見さうなので、まづ聞き流しにして居ります。

けれど妖聞はなか〳〵やまない。

『狐狸の仕業であらう？』『いや黑鍬の者の惡戲ではないか』などといふ取沙汰はまだしもの方で、そのうちに誰が言ひ出したことか、紛々たる臆說を排して、

『いえ、いえ、狐狸や黑鍬の者の仕業ではありません、たしかにあれは幽鬼が出るのぢや——幽鬼——異國人の幽靈が出てこの江戸城を呪ふのに違ひありますまい』

と、その存在性を肯づけるために、さらに臆說が臆說を生じ、うはさが噂を作り出す。——假に火のない所に煙が立たないものとすれば、異國人の幽鬼とは、何を根據として起つた說か、けだし大奥

の異聞のうちでも、今度のうはさは徳川八世のうちでは新しい怪異でありませう。

儒官、筑後守新井白石は、前々將軍家時代から久しく營裡に權勢をふるツて居ましたが、お代がはり以來、風向きがよくないので、早くも身を退く汐時と感じて、中野桃園に隱邸をしつらへて、その日、新將軍に別辭をのべるため、最後の登城をして居ました。

講書の間で、吉宗と白石と會ふ。

これが初めての賜謁で、初めての別謁です。

吉宗は紀州の屋敷元に居た時代からこの老儒があまり好きでなかつたので、今官を去る彼にも何の愛惜はありません。二つ三つ雜話の後、彼はふと、

『時に君美、そちならば存じてゐるかとも思はれるが、當江戸城の内に於て、異國人で誅殺された者の例があるであらうか』

『君美御奉公中には心得ませぬが』

『いや、近い世の事でなくともよい、大猷院殿時代、或は、臺德院殿の治世、または神君御開府の當時にでも……』

『宗門役の御制度、切支丹屋敷の御設置などが開かれました後ならば知らず、柳營御創始當時には、左樣な例も無いとは限るまいかと存じられます』

『ひとつ調べてくれぬか。奉公じまひぢや』

『數日の御猶豫を願はしく存じまする』

『急がいでもよい』

『取調べました後、文書をもつて取次衆まで差出しておきます』

『いや、公の書態では、老中共が見まいとも限らぬ。小姓組松平源次郎宛取次をもつて、よこしてくれい』

『畏まりました』

『もはや登城の折もあるまい。餘生安樂に暮すがよいぞ』

『洪恩の大、老生が世を退きました後も、忘れは仕りませぬ』

君美は暇を受て退きましたが、異國人の幽鬼が出る——そんな噂を心得ない彼は、吉宗が何のためにそんな例を調べよといふのか、腑に落ちないで下城しました。

急がずともよい、とは言ひましたものゝ、吉宗は心のうちで、今日は來るか、明日は屆くかと、新井君美の調べのつくのを待ち久しげでありました。

陽は日にまして、春めいて來る。

下向して在府中であつた年頭の勅使、廣幡、梅溪の二卿が歸つた後は、饗應の混雜やおびたゞしい供人も去つて、江戸城がにはかに廣くなつたやうな氣がしました。

それが、如月の初め、千代田の内外、やつと落着いた春日がつゞきさうです。

御錠口にかゝる手前の廻廊の梅、南殿の梅、三の丸の梅庭、ぽち〳〵と胡粉を打つたやうな花をつけ初めて、霞む夜は、大奥の明りも笑ひさゞめいて來ましたが、妖鬼のうはさは止みません。

『上様、御覽あそばしましたか』

松平源次郎は、紀州家に在つた時から吉宗に仕へてゐた小姓です。その源次郎には、君美から書狀のくるのを含ませてありますので、ふと、かう言はれた途端に、

『參つたか』

と、吉宗はそれと早合點をした樣子でした。

『いゝえ、あれではございませぬ』

落膽した樣子で、

『何ぢや』と、改まる。

『今朝ほど、黑書院のお庭先にある梅の木へ、短冊がついてをりましたさうな』

『誰ぞ、まづい歌でも認めたか』

『どなたの筆やらわかりませぬが　女文字で、吹上の妖鬼のことに寄せて、不吉めいた歌が書いてあつたとやら申します』

『さうか……』と吉宗は苦ツぽい微笑を頰にのぼせて、『女の爲たことでは取るにもあたらぬ。捨て置け』

『楓の間御用人鳥居外記樣が初めにお見つけになつて、そのまゝどうかなされました』

『それでいゝ、何事も、聞き流しにしておくがよからう。いづれ、水戸か、尾州か、吉宗に心よからぬ大奥雀の惡戲ぢやらう』

寛容に笑つてみせましたが、世繼早々の、三家の葛藤や、大奥と表方との執拗な暗鬪など、少しでも、その間の消息を聞きかじつてゐる源次郎の目には、やはりその日の吉宗に、多少沈鬱の氣のあつたことは見のがせません。

『吹上の惡戲は萬太郎の所爲ぢや。そして、それを不吉の兆らしく、尾ひれをつけて言ひふらすものは、紀州家にそねみをもつ氣の小さい大奥の女共ぢや』

吉宗はかう思つて、しきりとそれへの對策を考へて居りましたが、いはゞ内政の醜いこと、明みへ出して爭ふのは、新將軍の威嚴にかゝはる。

そこに辛さがありました。

『憎むべき萬太郎の惡戯――さて何としてくれようか』
焦々と思ひつめた揚句、ふと、かうもしようかと案に浮かんだ一策、源次郎に旨をふくませて、つひにある夜のこと、本丸の寢所からこつそりと外へ忍んで出ました。
本丸の薨は、夜がすみに汗をかいて、おぼろな春の夜更けた月が、紅葉山の森にぼんやりと有りや無しやの光です。
『源次郎』
『上様……』
目と目にうなづき合つて、番士の眼をおそれながら、ひらりと何處へか影を消しました。
その支度は、二人とも黒の頭巾、そして總身黒の扮裝に輕裝して居たやうです。――その用意と時刻とを思ひ合しますと、吉宗はいよ〳〵忍耐ならないで、自身、德川萬太郎の憎むべき行爲の實相を突き止めようと思ひ立つたものに相違ありません、
然しながら、彼と小姓が、あんな姿で、この朧夜を吹上へさまよひ出して行くと、かへつて風說は將軍家それ自身の影までを、妖鬼と見てしまひはせぬでせうか。
こよひも錦霜軒から起出して、吹上の奥をさまよひ歩く覆面の人影が二つ。

長局の女たちが取沙汰の種となつたのはその影ではありますまいか。さうとすれば、妖鬼すなはち、德川萬太郎と相良金吾であります。
『夜更けになつても、一頃と違つて樂になつた。春だなあ、金吾』
『早いもので、もう廿日餘り、よく御根氣がつゞきました』
『根岸に殘しておいた月江や次郎、そして釘勘なども、さだめし、如何した事かと消息を案じて居らうな』
『釘勘へは、先日、黒鍬の剛兵衛殿に手紙を頼んで、近況を知らせておきました故、まづ、御無事の點だけは、安心いたして居るだらうと存じます。……然し若殿』
金吾は前後の木立を見廻して、萬太郎に切株の根を床几にすゝめ、自分は土へぢかに膝行袴の腰をおろしました。
作兵衛瀧の水の音が、疎林の裏あたりにだうたうたふと夜氣をゆすつて鳴る。
夜は三更か四更か、とにかく深々たる丑滿の前後にはちがひありません。然し、氣候もすでに如月の半旬、風はぬるく、樹肌は汗ばみ、月は湯氣に蒸されたやうに朧な晩――有情の天地が人に與へる感じも、廿日前の霜針を立てゝゐた頃とは、だいぶ違つて參りました。
然し若殿――と聲をひそめた金吾は、四隣の氣配を探つてから、

『意氣地のない事を申すのではありませんが、こゝ廿日餘りの間に、夜毎、船見山、嵐山、赤壁溪の附近、ずゐぶんと隈なく搜索いたしましたが、いまだに、ピオの遺蹟といふやうな石碑一つ見當りませぬ』

『ウム、今の所では、殆ど何等の得る所もない』

『金吾が愚考いたしますには、恐らくこれは、徒勞に終るのではないかと存ぜられますので』

『なぜぢや』

と萬太郎は少し色を作す。

『いや、さりとて決して、千蛾老人の遺言が僞りであると申す次第ではなく、事實、慶長の昔、ピオがこの城内に刑罰をうけて、その亡骸もこの吹上の、奥に埋め隱されたものとしても、さる異國人の死骸を埋めたあとに、墓碑とか御堂などの、印を遺して置くまいと考へまする』

『だから、何うせいと申すのか』

彼の一念を翻すやうな言葉は、いつでも彼の不樓嫌を誘ふものである、とは金吾も知りぬいてをりましたが、

『將軍家の御不審を求め、又々、御本家へ迷惑を及ぼさぬうちに、御斷念なされた方が賢明ではないかと心得まする』

と、ツイ諫言を試みました。

案の如く、萬太郎は取ツてもつけない頭を振つて、

『金吾、そちは精が切れたとみえる。嫌なら去れ、わしは突き止めるまでこゝを去らぬ』

『精が切れたとは、お慢いおことば、左樣な金吾ではございませぬ』

『ならば、なぜ左樣なことを言ひ出して、わしの搜索に水をつけぬか』

『もしや將軍家の御不審もやあると、たゞ、尾州家のおん爲に、それのみを惧れます』

『そちは、何かにつけて將軍家々々と、吉宗に憚つてばかりをるが、彼とわしとは、部屋住時代から竹馬の友ぢや』

『いや、その心持は違ひます』

『大事はない、前もつて、彼の諒解も得てあることだ』

金吾は默つてしまひました。

『……是非のないこと』と獨り思ひ極めた樣子がその沈默に讀まれましたが、萬太郎は見て見ぬふりをしてをります。

――やがて、金吾は前の氣色を拂つて、

『若輩者の小悧巧な諫めだて、お聞き流し願ひます。もう御諫言はいたしません』

『するな！　萬太郎は思ひ立つた事を、貫かずには濟まさぬ性質ぢや』

さうした主從の話の間に、カサコソと、疎林の中を踏んでうしろへ近づいて來る者がありましたが、作兵衛瀧の水音に二人の神經はそれとも知りません。

だいたいと鳴る水の音に、四圍のものゝ氣に氣が着かなかつたのは、萬太郎主從ばかりではありません。

近づいて來る足音を、二人が少しも知らなかつたやうに、疎林の中をカサコソと歩いて來た何者かの黑い影も、そこに萬太郎と金吾が腰を下ろしてゐた事をば、さらに意識もなく足をすゝめて參りました。

樹と樹の枝にせばめられた細い小道からヒョイと一足踏み出した途端に、當然、不意にその姿を見合つた兩者は、

『あつ！』

と、獵師が鹿の足を踏んだやうな驚きをして飛び退きました。

『何者だッ？』

金吾は伏せ身になつて白眼を射向け、萬太郎は素早く立つてその人影の横を挾む。

ギョッとしたらしい相手の影は、突嗟なことに逃げ道を失つて、樹幹をタテに身を隱しながら、屹と、一方の手は刀の柄に行つてゐる。

おゝ、その手の白いこと！　夜目にも綺麗な手をしてゐる！　そしてその手は拔き打の閃光を吹かんとして、刀の柄にかゝつて居る。

（違ひない、いつぞや會つた優形の男だ！）

凝視をもつて兩方からはさみ擊ちに迫つた萬太郎主從は、彼の黑頭巾が隱してゐる星のやうな二つの瞳と、その仄白い顏容と、その黑い曲線とで、すぐにも思ひ當つたでせう。

いつか、赤壁溪の小道で見かけて、たゝみ上げた野州石の上に身を隱し、主從して這ひ松の蔭からのぞき下ろした時、ふと、上と下で、顏を見合せるなり風の如く去ツた覆面の白い顏はこの男に違ひありません。

また、その前後、二三度影を見かけた肩幅の廣い覆面も、二人には常から解けない疑問でありましたが、計らずも、重ねてこゝで打つかッたのは、願つてもない僥倖です。

『金吾、逃がすな』

いひつけると、一方も、

『心得てをります』

と、すでにその氣で、手捕りにしようとするものらしく、先の足許へそろ〳〵と蟇のやうに這ひ詰めて行く。

相手は進退に窮してゐます。

うしろは松や楓の林です。低い灌木の枝が手をつないで拒止してゐる。一方の横は亂岩叢竹、作兵衛瀧の水がその下を通つてゐるのです。

前には、手に唾して寄つて來る挾撃の敵二人。——何うすることも出來ません。

『柳營の者か、外から忍び込んだ賊か、名を言へ、名を申せ、次第に依つてはゆるして遣はさぬものでもない』

念のために、萬太郎がもう一應かう言つてみましたが、相手が立ち棟んだまゝ返辭もせねので、さてこそ、愈〻うさんくさい曲者と、いきなり相手へ向つて飛びかゝりました。

『あつ、若殿！』

先を制せられて、金吾が思はずかう叫んだのは、あながち敵に怯んで居たわけではなく、その時、幹の蔭から白い光が水を振るやうに走つたので、無手の暴虎を危ふんだのです。

案のごとく萬太郎は、相手を優形と見くびツて、手捕りにする氣でかゝりましたが、ハツと氣が着いて途中からさらにうしろへ飛び回つて、

『おのれ』

と、自分も柄を鳴らして鯉口をのばしました。

ところが、その一瞬です。

ザ、、、ツ——と嵐山の上の方から、風の神でも降りて來るやうに、あわたゞしく熊笹の戰きが聞こえたかと思ひますと、程去らぬ崖の上から同じ道へ、ぽんと飛び降りた一人の男がある。

倔强な體軀に、大反り打つた大小、覆面黑裝束といふこしらへも、この男こそふさはしく見えます。

——と、その山猫のやうに走ツこい男の嵐が、そこをサツと吹いたかと思ふまに、

『あゝツ……』と、身をよろめかしたのは萬太郎で、突然來たその男に、肩を突き飛ばされたものと見えました。

と言つて男は、そこに一顧もするではなく、何に慌てゝゐるのか一目散に、そのまゝ鵲橋の方へ疾風のやうに身を飛ばさうとするのを、

『待てツ』

一飛躍して追ひかけた金吾が、その長反の刀の鐺を、力まかせに引止めました。

鎧をつかまれた相手の男は、慌てもせず、ガツシリしたその體軀をひねつて、

『ちえツ』

舌打を鳴らしながら、金吾の襟がみをつかんで無雜作に振廻さうとしかけました。

小兵なりといへど金吾、さはさせじとあるべき所です、その手をパツと拂ひ上げると、兩々の體が相迫つてゐる機をすかさず、雷挺の早さで體當一本、

『えいツ』

と試みましたが、空を衝つて、手ごたへはない。

相手は韋駄天、鵲橋を一足とびに、その黒い影は、だうたうと水の飛沫く、流の彼岸に躍つてゐる。

逃がした！　殘念――と彼もつゞいて走らうとした刹那です、ふと忘れてしまつた萬太郎の聲で、

『金吾、金吾ツ』

と、助勢を求めるらしく、何かしきりと慌たゞしい。

『オ、』

氣がつけば一方にも、今二人して立ちすくませた、異裝優形の曲者が殘つてゐます。助勢を呼ぶ樣子では、萬太郎ひとりで手にあましてゐると見える。

兩兎を追ふもの一兎を得ず、逸早く、金吾はきびすを巡らして前の所へ戻つて來ましたが、もうその時は萬太郎の方も、優形の覆面を取逃がして、地團太を踏んでゐるあとでありました。

『その林の中へ逃げ込んだのぢや。こよひこそ、追詰めて、彼奴が何者であるか、その正體を見てくれねばならぬ』

優形の男を沒した木立の奥へ、彼はかう言ひつゝ驅け込みました。で金吾も、兩兎を追ふ愚を思ひ止まつて、彼につゞいて雜木の枝を搔き分て行く。

然し、奥へ奥へとすゝむうちに、林の小道は幾筋にも分れ、或は溪泉に切れ、或は丘の上下にうねり、遂に逸した優形の男の影は見つかりません。

その間に一刻の餘も費したとみえて、ぼやつとした朧月も、何時か江戸城の西の方――紅葉山の襟筋へ隱れかゝつて、どこともない有明の色が、四林の梢に仰がれて來ました。

その仄明りを賴りにして、針葉樹帶の小道から二つばかりの丘を越えてダラ〳〵と下りて來ると、目の前は廣い山芝の平地です。

『意外な所へ出たな、こゝは何處であらうか』

『やはり吹上の一部でございませうが、とんと覺えがございませぬ』

『思ひ出した、お廣芝ぢや。本丸の的場のある平庭ぢや。向ふを見い、弓小屋があり、茶亭があり、

そして、的場の土手が見える……』と指さしてゐるうちに、その手をすくめて、
『やつ、最前の奴があれに居るぞ』
『えッ、どこに？』
金吾もひとみを凝らしました。
『身を隠せ』
『はつ』
ばら〳〵と、横に驅けた二人は、芝生の平庭に、臥牛形に寢そべつてゐる巨石のうしろに體を潜めて、
『あの弓小屋の裏から歩いて來る者を見ろ』
『オ、、なる程、二人連れで……』
『察する所、最前は別々であつたが、あの優形の者と體の大きな男とは、同類なのに相違ない』
『ウーム、或は、さうかも知れません』
『今度こそ逃がさぬやうに。よいか』
『金吾にお任せ下さいませ。きつと、一名だけは捕り押へてごらんに入れます』
『いや、相手が連れ立つて來た以上、そち一人では手にあまる。わしは一方の、優男を組みふせるから

ら、そちはもう一人の者へ打つかッて行け』
腕をさすツて、謀し合せてゐるうちに、彼方の的場から來た二ツの姿は、目早くそこの人影を見たか、はッと足を止めて立ち止まりました。
機先を制するつもりで、萬太郎、
『うごくな！』
ねツくと立つて兩手をひろげると、金吾も臥牛の蔭を立つて、今度こそはと飛びかゝつて行く。
然し相手は前とちがつて二人組なので、意を強くして出直して來たものか、今度は逃げ腰を見せず待つて居たぞと言はないばかりに、
『曲物ッ』
却つて、萬太郎と金吾へ曲者呼ばはりをしながら、猛然と、逆に攻勢を取つて來ました。
曲者の曲者呼ばはり、沙汰の限りな圖々しいやつではある。今に、その覆面を引ッ剝いでやるから見てをれよ
――萬太郎は勇敢でした。
彼が勇敢なる故は、その柔術も刀法も、いはゆる大名育ちでして、眞に世の中の怖い者に會つた例

が少いからでもありませうが、近頃は、多少社會の淺瀬を踏んで、少しばかり命がけな經驗にもなれて來たので、いよ〳〵その性行が放膽に出て來た形でありました。

それと見て、

『あつ……早い』

と注意をしたのは金吾です。――金吾は何しろ萬太郎のその無鐵砲が見て居られません。

相手の身構へには、立派な用意が備つてをります。

で――思はず、金吾がアツと言ひましたが、もう萬太郎は體をとばして、敵の喉輪へ拳法の一手をはげしく突いてゐる。

と思ふと案の定です。

『えいッ』

鋭い一喝！

しまツた――と叫びながら萬太郎、敵の矢筈にかけられて、でんと大地へ投げ捨てられました。

金吾は金吾で、べつな覆面の男と對して、互に機を計つてをりましたが、それを見ると、萬太郎の危險を感じて、不意に、彼を投げた男の方へ助勢に驅ける。

『卑怯』

逃げると見たか、かういふのです。

そして、一方の覆面が、彼の帶際を食ひ止めて、ズル〳〵とうしろへ引戻す。

『何をッ』

『曲者！　神妙にいたせ』

こいつ、いよ〳〵法外もない言ひ草と、金吾はむッと怒りながら、

『だまれ、おのれこそ怪しいやつ、その黑布をひん剝いてやるから覺悟をしろ』

つかみ止めて居る、彼の腕くび、それを拯つてグツと身を沈める。もつれて二三歩、二人の體がよろけ合つたかと見ると、輕く身を寢かした金吾が、敵の體を足業に乘せて、ストンと猫回りに乘りかかつて、手もなくそこへ捻ぢ伏せました。

もがく敵の腕を膝下に敷いて、垂劍といふおや指一本、仰向けになつてる喉へグツと押すと、

『う〻……』と、彼の下の者は、くちびるに齒を當たま〻、もう一寸の身うごきもなりません。

さて、此ッ方はこれで片づいたが、

『如何なすつたらう？　萬太郎樣の方は』と、そのま〻、首をうしろへ、見廻して見ると、彼と優形の覆面とは、今や對峙の形を改めて、くんづ、ほぐれつ、互に手捕りにせんものと、人交ぜもせぬ肉闘の最中です。

それへ助勢に向はうとして、金吾は一人の敵を膝下におさへながら、口と片手で脇差の下緒を解いて、この邪魔者を縛りつけて置かうとします。

然し、それにも及ばなかつたことは、こゝを先途と善戰した萬太郎が、最後の鋭い氣當と共に、見事相手を倒したのでした。

そして、金吾と同じやうに、

「しめたぞ」

と叫びながら馬乘になり、さらに、その得意さうな顏を振顧らせて、

「金吾、組み伏せた！」

「オ、、お出來しなさいました。――が油斷をしてゐると、足業にかけられますぞ」

「なんの、案外もろい奴ぢや」

萬太郎はかう言ひながら、そも何者か、正體をたゞしてやらうと組み伏せた男の覆面をムヅとつかんで、その黑布を剝ぎかけましたが途端に、眼でも射られたやうに、アツ――と頭巾の布をつかんだまゝ身を彈かせたかと思ひますと、

「不可ない、いけない！　金吾ツ歸れ」

二人の巢としてゐる錦霜軒――船見山の山蔭さして、後をも見ずに駈けだしました。

「あとを閉めておけ。戸を。戸を……」と息をきつて錦霜軒の中へ驅け込んだ萬太郎の氣ぶりは、何ともタヾ事ではありません。

「どうなさいました、若殿」

金吾は合點がゆかないで、座に着くとすぐにかう訊ねましたが、

「水を……」

と、彼の色は紙より白い。

裏の流れへ出て、掛樋の水を器にうつして來ますと、萬太郎はそれをグツと飲んで、

「あゝ、驚いた」

と、初めて人らしく呟きました。

「實に、意外でございましたなあ、折角、組み伏せた怪しいやつの面を見てやらうとした途端に、いきなり若殿が驅け出されたので、金吾には、何が何やら一向理由がわかりませぬ」

「いや、そちの驚きはまだしもの事よ、この萬太郎は、生れて以來、あのやうな意外な目に會つた覺えはない」

「とはまた、一體どうした理で」

『力闘して、やつとわしがねぢ伏せたあの覆面ぢや』
『はい』
『そも、何者かと、そちは思ふ？』
『分りませぬ』
『吉宗ぢや』
『げツ、……將軍家』
と言つたまゝ、金吾も色を失つて、さすがに二の句もありません。
まさか――と疑ひたい程ですが夜目に透かして見たとなどといふあいまいな話ではなく、彼をねぢ伏せ、馬乘に跨がつて、その覆面までめくり返して見た上の事ですから、いくら瞬間の場合とはいへ見違ふなどといふはずもありますまい。
『すると先頃から、嵐山の裾、赤壁の水邊などで、時折出會つた怪しい者は、將軍家とその侍臣であつたのでございませうか』
『どうも、さうであつたと見える』
『然し……』と、金吾は少し小首をかしげて、
『拙者の組み伏せた男の方は、どうも何日もの男とはやゝ違ふ氣がいたしまする』

『何う違ふといふか』
『第一肩幅、體のこなし、そしてつかんだ腕のもろくもねぢ得た事などが、あのウワ背丈がある敏活な曲者とは、まるで手ごたへが相違してをります』
『すると、初めの覆面の男とは、別人であると申すのぢやな、だが待てよ……さういたすと、吹上の深夜に、暗をさぐる者達は、わしとそちと、後、幾人をるか分らぬやうな事になるではないか』
『まさか、さう幾名もをるわけはございませぬが、とに角、別人には相違ございませぬ』と金吾は、それだけを斷定しましたが、何としても胸づまりなのは、將軍家へ對しての失策です、强腹な萬太郎にしても、これだけは氣持がわるいと見えて、しきりと、吉宗の心を臆測したり、後の氣まづさを考へて、このまゝ默つて押し通してゐるか、それとも本丸へ伺候して、自分の目的を打明けてその過失をわびようかなどと、その日は、不快な迷ひに暮てゐました。
『なんの！　吉宗の新將軍づらに、わびをするなどは忌々しい。わしも尾州の德川萬太郎だ、彼が日本の將軍として納まるなら、自分は海を蹴つて、羅馬に王座を占めてみせる』
夜になると、かれの眼は冴え、心はしきりと磨げました。
金吾が案じるのを、
『捨ておけ！』

言ひ放つて外へ出る。

――いつもの支度、穿き馴れたわらぢの音もさせぬ忍び足で。

それから約七日ばかりの間、吹上には何の出來事もありません。

すると、その晩は、春にはめづらしく、水氣のない空に、常よりは明るい月がかさもにじませずにヒツソリとさえてゐた夜半でした。

型のごとく、錦霜軒を出た二人が、その晩に限つて、嵐山から山里の苑へ足を向けて曲がりかける と、山蔭の畑地の中に、一つの人影がチラと見える。

そこは、千代田の御藥草園で、俗に、人參畑とも呼ぶ地域です。養生所の役人と藥草園の係り以外のものは、足入れを嚴禁してあつて、その圍ひと防風林をかねた灌木の藪が、垣のやうに畑の北がはを取卷いてゐる。

『やつ?』

足を止めた萬太郎は、もう屢々見てゐるので、月明りの遠目にもその藥草園の人影を、いつぞや取逃がした優形の覆面と見て、

『金吾、あれはよもや、吉宗ではあるまい』

姿を隱してさゝやきました。

前の失敗にこりてゐるので、金吾も充分に注意しながら、藪の蔭を這つて近づいてみると、どうも何日ぞや廣芝で組伏せた者とは、その柔軟な輪廓が違つてゐます。

『あつ……』

途端に、勘のするどい優形の男は、藪の枯れ葉がカサリと鳴つたかすかな氣配に驚いて、忽ち、飛鳥のやうに人參畑を横に切つて逃げ出しました。

が――そこには枯れ木の柵があり、柵の外には萬太郎がひそんでゐたので、

『待つてゐた!』とばかり、彼がそこをつき破つて出て來る所を、大手をひろげて飛びかゝる。

――と思ふと一閃の流刄が、月光を切ツて彼の眞ツ向へ鳴つて來ました。交しましたが萬太郎は、その切ツ先に手の甲を掠られて、ピツと散つた冷めたいものに、はツと氣をすくめると、そのせつなに、艶めいた梅花香の薫りがプンと鼻先を一過して、相手の影は風を殘して疾走してゐる。

『えゝ、またしても!』

今は、意地です。

指の先から血を散らしながら、追はうとすると、十歩ばかりの間隔の先で、屹と、振顧つた覆面の白い顏が、自分の方を睨むかと思はれた途端に――

『ヤツ』

髪と共に、飛んで來た小柄――キラツと白い光を引いて、彼の耳をあやふくも掠めました。

『たしかに、吉宗とは別人。きやつこそ曲者！』

金吾も追ふ。萬太郎も飛ぶ。

何日かの夜とは違つて、月明の晩、それに身を隱す樹林も少ない嵐山の裏です。

かなたこなたと追ひ廻された優形の男は、かなり狼狽した樣子で、やがて、息をせきながら、裏山の一端まで逃げ込んで來ると、厚ぼつたい熊笹の茂みから身を跳らして、古びた祠の扉を押して飛びこみました。

『もう袋の鼠だ。あの堂の中へ逃げ込んだのが運の盡き』

『のがれぬ所と、觀念したものと見えまする』

喜連格子の外へ寄つて、堂の破れびさしを仰ぐと、北辰石神といふ額があります。江城鎭護の石神として、太田持資が築城以前からあつたのをそのまゝ江戸城の最も奥まつた所に祠つてあるといふのは、こんなお粗末なものかと萬太郎には思はれました。

それと、ふと頭を掠めたのは、石神といふ額の文字です。

目白の丘の石神堂、高麗村の月江の屋敷の庭にある石神堂、そのほか、武藏野のをちこちに限りなくあるといふ石神堂が、この江戸城の奥にもある？……

この江戸城も、遠い昔は、やはり武藏野の一部であつたことを思へば、なんのふしぎもありませんが、彼には、ふしぎな奇遇のやうに感じられてならない。

何はともあれ、彼は金吾と共に、その喜連格子を開けて、中に潜んだ優形の男を引きずり出さうと意氣ぐみました。

然し、そこにはもう誰も居ません。二坪ばかりな鞘堂の中には、魔術師の箱のやうに、優形の男が變つたかと思はれる一體の石像が立つてゐるばかりです。

『不思議な』

茫然と、二人は顏を見合せて、

『居ない』

と、さらに言葉を同時にしました。

『たしかに、この堂の内へ逃げ込んだと見たが、金吾、そちの眼にはどう見えた』

『拙者も、確とさう認めましたが』

『居らんとは不思議千萬、もしや……』と天井から床板へひとみを落した時、萬太郎はハツと足をひ

らいて、
『こゝだ！　床を上げて見い』
『オ、』と膝を折つた金吾が、喜連格子を洩れる月光に、よく〳〵そこをすかしてみると堂の一隅の床板が一枚、こゝろもち浮いてゐます。
ぽんと、その床板を拂つて見ると、縁の底へ落ち込んでゐる石段らしいものが見える。さてはと、二人はそれへ降りて行きます。――ふた段、五ツ段……十二三段、存外に深いなと思ひながら、とに角手さぐりで一歩々々と降りてゆきますと、やつと、地に足が着くまでにはおよそ廿四五歩の階足を下りました。
『どこだらう？　こゝは』
『築城には秘密として、知るものはございませぬが、これこそ、うはさに承る、江戸城の間道ではございませぬか』
『ウム、或はさうかも知れぬ。――金吾、火をすつてみい』
『はつ』
金吾は燧打ぶくろを解いて、青白い火花をチカ〳〵とすつてゐましたが、やがて、それを附木に移して、

『オ、、土肌に鑿の痕があります』
と萬太郎の前へそれをかざす。
燃え盡ると、すぐあとの附木へまた火を移して、そこらを照らして見ますに、やはり金吾の察しにたがはず、そこは何處の城にも必ずあるべきはずの間道で、殊に、開鑿者の名とおぼしく、岩壁面の一端に、かういふ文字が彫られてあるのを見出しました。
江城ノ秘孔、二道有、一道ハ西丘ヲツラヌイテ走ルコト里餘、白丘ノ一道ニ通ズ。一ハ北道、マタ東折シテ十餘丁、スナハチ溪水、袖海ニ通ズベシ。
越後三德流後學村上能登守之ヲ拓。
開鑿者の年代はありませんが、德川家お抱への軍學家に三德流の系統も村上姓もありませんから、これは、家康の移る以前――上杉、太田持資時代にひらいたものゝやうに考へられる。
が――萬太郎です、彼は今、そんなどころの考證ではありません。
『讀めた』
附木の火の燃えつきたのを、ふツと捨てゝ、
『こゝが曲者の出入口にちがない』
『しかし、これには、二道ありと誌してありますが……』

『まあよいわ、とにかく急げ』
無音、無明の間道です、いかに何でも、月光の下を飛ぶやうには行きませんが、とにかく迷はずに進みました。
すると、岩壁の誌文にたがはず、間道は途中から二股にわかれてゐます。そこで、二人は、そのいづれへ行かうかについて、しばらく案じ合ひましたが、結局、萬太郎は北方の一道へ向ひ、金吾は西へ向つてその出る所をつき止めることに一決しました。
西道は白丘に通ずと言ひ、また、北道は溪水より袖海に達すとあります。――さてそこで、ふた手にわかれた二人の行く先に、各々どんな視界が開けて來たでせうか。

夜光朝光

この二筋の間道――分れて何處へ出るものやら知れませんが、とにかく外部へ出るものと假定して、後に落會ふ所を約束し、金吾は西へ、萬太郎は北方へ、各々方角をべつに急ぎました。
暫く暗をたどると、萬太郎のとつた行く手の先に微かな明りが見えだして來ます。
『意外、こゝはお茶の水の谷底だ』

さうです、やがて彼が出た所は、茗溪の底で間道の口は、青黑い水が波紋を描いてヒタ〳〵と流れてゐる。
のぞいてみると、水の色がかなりに深い。流れの幅は七八間ばかりで、すぐ向ふに岩壁が見えますが、とても足で渡り得るやうな淺瀨ではありません。
『はてな？　……』と當惑して、樹木の枝がふさいでゐる間道の上を仰ぎましたが、そこからも、猿でない以上は、何處へも登る足がかりがないので、しばらく、空しい時を過ごしてをります。
月明りとのみ思つてゐた水面の明るさは、いつか夜明であつたとみえて、彼が、當惑してゐるひとみの前は程なく輝かしい朝陽の色に染められて、さま〴〵な小鳥が水邊を飛び交し初める。
と――茗溪の上の方から、
『あぶねえ、あぶねえ、おれがやるから棹を貸しな』
『なに、大丈夫だよ』
『だつて、打つけてばかり居るぢやないか』
『臆病だなあ、おぢさんは』
『何も怖がるわけぢやないが、物見遊山ぢやあるまいし、舟が廻つてばかり居ちや爲方がねえや』
人聲がする――一艘の小舟が見え出す――そして矢のやうに、萬太郎の目の前へ流れて來ました。

『オ、、そこへ行く舟の者、ちよつと向ふまで渡してくれい』
彼があわてゝ呼びかけると、
『おツと！　舟を止めろ』
一人の持つてゐた棹を引つ奪くつて、蓑笠を着けた男がすばやく彼の前へ小舟の先を着けて來る。
『恭けない』
と、萬太郎が、ぽんとそれへ飛び込んだ途端です。
『やつ、あなたは！』
愕然とした聲で、舟の二人は着てゐた笠と簑とをかなぐり捨てました。
『オー、そちは釘勘と、高麗村の次郎ではないか』
『萬太郎樣とは少しも氣がつきませんでした。して、何うしてこんな所に？』
『いや、仔細は後に話さう。――それよりはこの舟で、そち達はどこへ行かうといふ考へぢや』
『實は少し心當りがあつて、ゆうべから夜通し、このお茶の水を漕ぎ廻つてゐたのですが、夜が明けたので、桐畑の家へ歸らうとして參つた所です』
『では、わしと一緒に、根岸の方へ來てくれぬか。そこへはやがて金吾も落合ふ約束になつてゐる』
『いろ〳〵申上げたい事もございますから、すぐにお供を致しませう』

『だが、舟は』
『紅梅海岸の番屋へ預けて參ります』
互に聞きたいことも積もつてゐますが。そこでは要談もムダロも制して、舟から上ると駕を雇つて根岸の下屋敷へ急がせました。
そこへ着くと、次郎は誰より眞つ先に、屋敷の庭へ駈け込んで行く。そして、
『お嬢樣！　お嬢樣！　萬太郎樣がお歸りでございますよ』
有りツたけな聲で月江の部屋へ向つて呶鳴る。
さう聞くと、われを忘れて、障子の内から轉ぶやうに立つて來た月江とおりんの兩女が、
『えつ、萬太郎樣が、お戻り遊ばしたつて？』
『次郎や、ほんとにかえ？』
『嘘ではございません。嘘だと思ふなら、玄關の方へ廻つてごらんなさい。……だけれど、お氣の毒樣なことには、お嬢樣の大好きな、金吾樣は御一緒ではございません』
『まあ。次郎があんな事を言つて！』
『オヤ〳〵、お嬢樣が今にも泣きさうな眼をして來た。だが、お笑ひなさいまし、御一緒ぢやありませんが、金吾樣も、今日は後から此處へ來るさうです』

次郎が揶揄ふその顏へ紙礫をぶつけて、おりんは月江と共に玄關へ駈け出しました。

萬太郎を主座にして、月江、釘勘、次郎、おりん、かう五人が何かの話に時刻のうつるのを忘れてゐると、

『相良にございます。只今到着いたしました』

と、こゝで落合ふ約束のあつた金吾が、遲れ走せに顏を見せて、同じ席に加はります。

萬太郎は、待かねて居て、

『そちの向つた間道は何處へ出たか』

と、何よりは先に、それを訊く。

そして、自分が出た地點と、釘勘や次郎に出會つた理由を話します。

金吾は膝をすゝめて、

『拙者が歩みました西道は、行くこと暫く、やがて、空井戸のやうな所に突き當つたのでございます。四方は削り立つた岩面、上へのぼる手がかりもないので、小柄をもつて、一段々々足掛けを掘りこの通り……』と、赤土にまみれた衣服を示して、

『やつとの事で、這ひ上つてみますと、そこは古びた一宇の堂内……吹上の石神堂と同じやうに、や

はり一個の石神が祠つてあります』

『ウム、その堂内に拔けて居たのか』

『されば……出て見ますと、人も通らぬ森の中で、何處かの丘と思はれました。で、坂を下ると、程なく例の切支丹屋敷の門前に出ましたので、ほゞ地點の見當もつきあれから急いで參つた次第です』

『ヘエ、するとそこは、あの切支丹屋敷の近くなんですか』

釘勘は曾つて見た、目白の丘の石神堂を思ひ合せて、ふしぎな念に衝たれてゐました。萬太郎は話頭をかへて、釘勘に向ひ、

『して、そちが今日、次郎と共に、お茶の水を下つて來たのはどういふわけぢや』

『それも、たゞ今細かにお話しようと思つてゐた所でございます』と話は釘勘の方に移つて、彼の口から、その後、次郎が突き止めたお蝶の行動や、日本左衛門を大川端の隱れ家から逸したことなどを語つて來て、

『――すると、前夜のことでございます。神田川の土手下から妙な侍がお茶の水の崖へ這ひ込んだといふ、番屋からの知らせがありましたので、それを探しに參つた所が、夜ツぴて、舟で見て廻りましたが、何の手懸りもなく引つ返して來た所を、萬太郎樣に呼びとめられたのでございました』

『では、番屋の者が認めたといふ、その侍の風體が、日本左衛門に似てをつたのか』

『さういふ知らせがあつたのは、一度や二度の事ではなく、あのお茶の水の崖上にある、駿河臺の番屋からも、同じやうな事を知らせて來たことがあるんです』

『ふウム？……』と萬太郎は金吾と眼を見合せて、自分の踏んで來た徑路に符節を合して考へこみました。

『どうぢや金吾……わしは何か一縷の曙光が見えて來たやうな氣がするが』

『拙者にも、おぼろげながら、吹上に出沒する曲者の輪廓が、心に浮んで參りました』

御隱家樣の殺害された當夜、彼の部屋から失はれた樟板の秘圖――そしてその割れたる半分の行方など、釘勘が、その後極力さぐり集めた考査の料を心のうちでつぎ合せて、ぢいと默想してみますと、彼にも、黑い二つの影が浮んで來ました。――それは萬太郎の考へる者や金吾の考へとは違つてゐるかも知れないが……。

疲れてゐるので、一同はそれから一睡の休息をとつて、夜に入つてから、また何か重大な凝議に一間を閉め切つてゐました。

そして、その密議がまとまると、萬太郎と金吾は、ふたゝび例の門道から江戸城へ戻り、釘勘は次郎を連れて、お粂ひとりの留守をしてゐる桐畑の家へ歸つて行く。

――お粂。あの丹頂のお粂。

彼は途すがら、その女の身の上にも、さまゞゝな默想をめぐらせて居る。

奉行所へ送り込めば、死罪をまぬかれない凶狀のあるお粂を、目明しの自分が、ひそかに家に隱してゐるのは、まつたく相良金吾の賴みをうけてしたことです。

金吾は、お粂には怨みもあるが、また再生の恩義もある。ことに、あの螢の飛び交ふ甲州の夏の夜自分に責められて、みづから毒を顏に浴びて自殺しようとした彼女であつてみれば、悔悟の狀は充分に見えてゐます。怨むところはありません。

で、甲州から差立てられる時、金吾がひそかに、その助命の工夫を、釘勘に賴んでおいたものとみえます。然し、いつまで現在のまゝでも置けますまい。

この處分は、彼の胸の宿題でした。

やつとそこらの額風呂の戸があいて、紅殼いろや淺黃のれんの下に、二三足の女下駄が行儀よくそろへられ、盛鹽のしたぬれ石に、和らかい春の陽が射しかける午少し前の刻限になると、丁字風呂の裏門から、すつと中に消え込む十八九の色子がある。

曙染の小袖に、細身の大小をさし、髮は髻に結ひ、前髮にはむらさきの布をかけ、更にその上へ青い藺笠を被つて顏をつゝみ、丁字屋の湯女たちにも羞恥ましさうに、奥の離れ座敷へ燕のやうに身

を隱します。

そこの小座敷には、初期の浮世繪師が日永にまかせて丹青の筆をこめたやうな、お國歌舞伎の圖を描いた二枚折の屏風が立て廻されてあつて、床には、細仕立の乾山の水墨物と香爐には冷やゝかな薫烟が、糸のやうにゐゝとのぼつてゐました。

『おうお蝶か。けふは來ぬかと思うてゐたが』

ふと見ると、屏風の蔭に、友禪の小蒲團をかけて、枕元に、朱羅宇のきせるを寄せ、黑八を掛けた丹前にくるまつて居た男がある。

日本左衛門です。――むつくりと起て、

『一風呂浴びて來るから、待つてゐてくれ』と、手拭をとる。

『えゝ、どゆつくり』

お蝶はニツコとしながら、袴腰の若衆すがたで、何もかも打解けた世話女房のやうに、あたりの物を片づけます。

この額風呂の庭には、植込もかなり多いので、離れの一棟も母屋からは見透されません。手拭を持つた日本左衛門は、輕い庭下駄の音を飛び石に遠退かせて、向ふに白い湯氣をあげてゐる風呂場の中へかくれました。

それを、濡れ縁の端から見送つてゐたお蝶は、彼の姿が隱れると、キツと眼くばりを變へて、部屋の四方を見廻しました。

然し――衣桁にかゝつてゐるのは、常に彼の身につけてゐる黑の衣服と一すぢの白博多で、そのほかは、床の幅であり、亂れ箱であり、これと言つて變つた品も目にとまりません。

が――やがてうしろを見廻しながら、お蝶が隅の地袋へ屈み寄つて、その袋戸を開けますと、一個の包がかくしてある。

『オ、……』と、彼女はすぐに、解いてあらはれた品物へ目を見張つたのです。

ちやうど書物でもくるんである程な大きさに見える包の中には、薄絹で作つた、忍びの黑衣に、土のついた伊賀流の布わらじが一足、そして、その下に秘してあつたのは、樟板の秘圖の半分でありません。

その欠けたる方は、たしかヨハンの手に渡つてゐるはずで、今は、ヨハンからお蝶の手に與へられてゐる。

完全なものが兩分して、完全な秘圖の用をなさない以上、各々その一方を求めてゐるのは想像に難くないことで、お蝶も日本左衛門も、口にも色にもそんなことは微塵も現してをりませんが、心の裡では疾くから探り合つてゐた品物にちがひない。

（さうだ！　今のうちに）

彼女のひとみに、さう言ふやうな意志のうごきが險しく見えたかと思ふと、お蝶の手はすばやくそれを元の通り包み込んで、自分の、袖の下へ抱へやうとしかけます。

すると、不意に濡れ縁の障子が開きました。

『おやつ？　……』

『あつ……』とお蝶はあわてゝ地袋の中へそれを戻して、何氣ない顏を作つてひとみを上げますと、日本左衛門ではありません。

『こいつはいけねえ、座敷ちがひをしてしまつた。へゝゝゝ、つい醉つて居るもんですから、飛んだ失禮をして、ごめんなすつておくんなさい』

無論、額風呂の客にはちがひありますまいが、作り笑ひをした眼元に一癖のある町人が、ヒヨコヒヨコ頭を下げながら、ぷいと縁先から姿をかくしました。

ですが、町人の去つたあとも、何時までもお蝶の胸は動悸が納まらないやうに、あの睫毛の濃い眼を見ひらいたまゝ。

『あゝ、よかつた……』

と暫く胸騒ぎをおさへてゐます。

かうして、ある時は女のまゝ、ある時は若衆の男姿で、戀に寄せて、彼に近づいてをりますが、もし今の擧動を、あのけい眼な日本左衛門にちよッとでも見られたならば、もう彼女の運命も長くは無事で居られません。

すると、すぐその後へ、濡れ手拭をさげた日本左衛門が戻つて來て、

『ア、、さつぱりとした』

だるさうに湯上りのした兩足を、疊の上へ投げ出しました。

彼の姿を見る途端に、お蝶の眼ざしはさりげなく鋭さを消して、

『すこし髪がくづれましたのね、私が、梳いてあげませうか』と、鏡臺から取出した櫛を抓んで、甘へるやうに、背なかへ寄る。

しなやかな白い指が、自分の髪の根へこゝろよい櫛の齒をくり返すのに任せながら、

『おれが風呂場から出て來ると、この離れの植込みから、飛び出して行つた男があるが、座敷をのぞいて行きはしなかつたか』

『何ですか、座敷ちがひをして來たと言ひ譯をしてゐましたが妙な素振りだッたんですよ』

『犬だらう。またこゝにも長居はできねえ』

『でも、けふ一日ぐらゐは大丈夫でせう』

『まあ日の暮れねえうちはやつて來まいが、油斷をしてゐると、この前の時のやうに、飛んだ泡を食はなければならねえ、明日は少し方角を變へて、山の手の白梅亭あたりへ宿更へをしよう』

『ぢや、わたしが、また明日の今頃に、そつちの方へ行きませうね』

何時のまにか、櫛はどこかに姿を隱して、白蛇のやうなお蝶の兩腕が、うしろから日本左衛門の肩にからんでゐます。

で、その肩越しに、お蝶の頰が彼の頰へすり合ふやうに寄りついて、その髪の香、肌の香、ものを言ふ息のかほりまでが、咽せるばかり直接に感じられる。

『ね、行きますよ、白梅亭へ』

『同じ額風呂でも、あそこならば人眼が少い。だが……』と日本左衛門は、腕に來てゐるお蝶の白い手の甲へ自分の手を重ねて、

『お前は、なぜ一つ宿に、泊まつて居ないのだ。さうすれば、滅多に犬に嗅ぎつけられることもないのだが』

『だつて、日が暮れると、あなたこそどこかへ出て行つてしまふんですもの』

『そりや白浪の世渡りには當り前だ。おれたちが、夜をムダに過して居ちや。飯の食ひ上げになるだらうぢやねえか』

『だから、私も家へ歸るのよ』

『家へ？　……』と、男の眼が自分へ來ると、お蝶はあわてゝ打消して、

『家と言つても、わたしに家なんかありやしませんけれど、そツと、切支丹屋敷へ寢に歸るのよ』

『それが、おれには少し、合點がゆかない』

『なぜ？』

と、お蝶はまぎらすやうに、男の體をゆすぶりましたが、彼の面持ちはやゝ眞面目です。

『なぜといふ迄もない話だ。あの切支丹屋敷は、お前にとつては、怖しい故郷だぜ』

『エ、ほんとに、怖しい故郷ね、あそこの憶ひ出に、一つだツて、いゝ過去はありやしません』

『まして、宗門役人のゐる場所だらう、それを、所もあらうに、毎晩そこへ寢に歸るといふのは少しをかしい話だ』

『所が、今のやうな、岡ツ引や何かゞ絶えず尾き廻る外よりも、あの廣い山屋敷の方が、どれほど私には安心なのか知れないのよ。……なぜかと言ふと、あの山屋敷の中には、犬の目も光らなければ、宗門役人だつて、まさか私が、切支丹屋敷の中に寢に來てゐるとは氣がつきやあしませんもの……』

いかにも、その合理的な事は、日本左衛門にもうなづけます。然し、いはゆる敵の營中に眠つて敵

を眠らせぬといふやうな大膽な所業は、日本左衛門や雲霧ぐらゐに甲羅を經た大盜でも、容易に行へない離れ技で、まだ十九や廿歳の小娘が口にするさへあまりに不敵であり過ぎる。

理にうなづいても、やはりその點では、彼はお蝶に油斷ができないと思つてゐます。

けれど、いくら心を許すまいと思ひつゝも、かうして、自分の愛撫を求めてやまない蠱惑な彼女の兩の手を何う振り離しませうか。ともすると、危險な四圍におかれてある身をも忘れさせさうなお蝶の艶な媚態をどうして憎めませうか。

まして、日本左衛門といふ男には、愛といゝ情といふ形だけのものにすら、常に渴いてゐる弱點がある。そして、自分もそれを知つてゐる。

率八の家の納屋から、二人して、大川へ舟で逃げてから數日の間——江戸の窟風呂や旅籠を轉々として、あぶない逢ふ瀨をつゞけて來ましたが、まだ二人の戀は、あの納屋で囁いたことば以上には、一歩もすゝんで居りません。盲目的な相愛のもの迄には燃えてまゐりません。

そのくせ、日本左衛門の惱ましさうな態度や、お蝶が、危險を冒して毎日訪ねてくる樣子などを見ると、表面いかにも熾烈で、他愛のない睦語に過ごす半日の二人の仲には、どんな戀の飽滿が釀されたかと思はれるのですが、さうしつゝ、戀は一歩もすゝみません。

その矛盾は、夕方になると、二人の顏いろにあらはれます。

お蝶が來る——障子が閉まる——二人のさゝやきが甘さうにもれる——姿も見せないで半日が暮れる。そして、夕方が迫る。

かういふ順序が、窟風呂の離れへ來てからも、毎日判で押したやうにつゞきましたが、丁字風呂の二階に、ぽツと春の灯が橙色にともるころになりますと、お蝶も、日本左衛門も、期せずして醉のさめたやうなひとみに變り、二人の心に冷やゝかな刄と刄が鬪ひはじめる。

燈火を嫌ふ妖精のやうに、離れへ行燈が運ばれると、その明りのはいる先に、丁字風呂の裏門をスウと歸つてゆくのはお蝶です。

『やつ？　……誰かこの袋戸に手をふれたな』

彼女が去るとすぐ後で、かう氣がついて愕とした日本左衛門が、そこの包を解いてみると、夜毎に使ふ黑衣の類は殘されてありますが、その下に秘めておいた樟板の半分は何處にか失せて見當りません。

『ちッ、……さてはお蝶が……』

嫌疑はお蝶に走るよりほかはない。

まだ宵ですが、いつもさうする事なので、離れの雨戸を閉めきると、寢につくやうに見せかけて、中で忙しく身支度をすると、横の小窓から身をひるがへして、ひらりと裏木戸の外へ走り出し、お蝶

のあとを追ひました。

彼は、神田川の火除地まで驅けると、脛のきゝさうな辻駕を拾つて、

『切支丹坂の下までやつてくれ』

酒代をハヅんで一氣に急がせ、例の獄門橋の藪だたみに身を隱して、お蝶の通るのを、待ち伏せてゐる。

――と、知るか知らないか、やがて、あの急な暗やみを、ヒタ〳〵と小走りに降りてくる姿をすかしてみると、藺笠に振袖、まぎれもない色子姿のお蝶であります。

『待て！』――とその前へ、大手をひろげて立たうとしましたが日本左衛門は、今夜といふこの機會に常に解せないでゐる彼女の行動を突きとめてみる必要もあると考へて、その姿をやり過ごし、見え隱れに、お蝶の後を尾けました。

見てゐると――曾つて、自分が官庫に忍びいる時、足がかりにした見覺えのある塀際のムクの木から、その姿が苦もなく山屋敷の中へ飛び越える。

『あつ……あの高い塀を』

驚くべき敏活な動作を見せつけられて、日本左衛門すら、その姿を追ふのに心を急いた程です。そして毎日會つてゐるお蝶とは、まるで別人の氣さへしました。

『ヨハンや……ヨハンや……』

敏捷に忍びやかに、榎の下の石牢まで寄つて行つたお蝶は、

『ヨハンや、今歸つたよ』

極めて低い聲でその鐵窓をほと〳〵とたゝきました。

『オヽ、お姫樣ですか』

陰靜な答へが暗で應じます。

『入口をこしらへておくれ』

『ただ今』

黑豹のやうなヨハンの影が、鐵窓の下の一部の棧を外しますと、お蝶は忽ちその中へ影を消して、うしろの木蔭まで尾けて來た日本左衛門をして茫然とさせました。

『あゝ、これは何うした事だらう？　……』

さすがの彼も、この奇異な事實を目のあたりに措いて、何の想像も判斷も及びません。

石室の中では、ほんの微かに、茶色の鈍い光線が射したやうに思はれましたが、それは一瞬で、依然たる冷めたい暗と沈默があるのみです。

ほとんど、地をはふやうにして、鐵窓の外に耳を付けてみると、黑い帳を垂れたヨハンの寢床で、

お蝶とヨハンとの話し聲が、木の葉のさゝやきぐらゐな低聲で彼の研ぎすます聽覺へ觸れて來る。

『何うなさいました、その後の首尾は？』

かういふのはヨハンの聲のやうで――

『この頃は、こゝへも稀にしかおいでがないので、何か變つた事でもないか、それとも、いよ〳〵あの方が分明したかと、いろ〳〵想像ばかりして居りました』

『ヨハンや、よろこんでおくれ』

『では、私の想像があたりましたか』

『まだそこまではゆかないけれど、近いうちに、私はきつと、夜光の短刀を手に入れてみせる』

『オヽ、定めし、御苦心でございませう、お體もお疲れでございませう。……けれど屈してはいけませぬ。私が使にやつた切支丹族の者も、もう長崎に着いてゐませう。そして、敦賀の港に、船を廻して待つてゐませう。もうお姫様が幸福の御生涯は船出の支度をとゝのへて彼方に待つて居るのでございます』

幸福の船出といひ、敦賀津に船が待つといひ、またお蝶をさしてお姫様と呼ぶことなど、途切れ途切れにもれてくるヨハンの言葉は、日本左衛門には少しも綜合がつきません。

ただ、その言のうちの端的な意味に、ふしぎな耳をそばだてるのみです。

ヨハンの囁きが切れると、さらに低いお蝶の聲で、

『ぢや、敦賀津の港へゆけば、私を乘せて行つてくれる、羅馬の船が待つてゐるのね』

『はい、夜光の短刀さへ手に入れて參りますれば、すべてのことは、船のカピタンが心得てゐてくれます』

『夜光の短刀の方のことは、もう私の物になつたのも同じだよ。なぜかつてヨハン、これを見ておくれ……』

『おつ……これは樟板の半分』

『私の手にある圖面と合せて、これでピツタリと吹上の何處にかピオの遺品が埋づめてあるかが分るだらう』

『圖面がそろへば、一目で分明しなければならないはずです。ど、どれ、お見せなさいませ……』とお蝶の齋したそれと、手許にある半分とをつぎ合せて、二人が眼をこらし合つてゐるらしく、帳の隙から弱い燈火がそこに聲もなく搖れてゐる。

『ウーム、おれは何といふ愚か者だらう。お蝶のやうな小娘の手くだに、今日までうま〳〵と乘せられてゐたのだ』

鐵窓の外に體を屈してゐた日本左衛門は、思はず心のうちでうめきました。先には、お粂に苦い經驗をなめさせられ、今またお蝶に首尾よく騙されたばかりか、樟板の秘圖まで彼女にシテやられたのです。

元々、彼はお蝶といふものを、一個の不良少女ぐらゐにしか思つてゐない。それが、夜光の短刀を目がけてゐたり、牢の中のヨハンが糸をひいて居ようなどとは、今初めて投げつけられた驚愕です。

戀と慾を兩天秤にかけて、彼女の愛と短刀を併せて手にいれようとした日本左衛門の計畫は、そツくりそのまゝ、反對に、お蝶の方から致された形になつてしまひました。

『おのれ、どうしてやらうか』

怺へんとしても彼の四肢は、髪の根のしまるやうな忿怒のために、身ぶるひを刻んで手の痛くなるまで鐵格子の下に握りしめてゐる。

石室の奥では、ツギ合せた樟板に依つて、何か明確な地點を見出したものらしく、

『これだ。オ、こゝだ……お姫様、この藥草園の東の方に、妙な印があると思ひましたが、今、一方の板をみると、その印が解いてある』

『では矢つ張、あの藥草の中には違ひなかつたのねえ』

『さうです。ま、お待ちなさい……。ウム、判りました。一方の符號と一方の解を考へ合せてみますと、つまり、藥草園のうちの北の境から九十六歩、東の崖から四十四歩、その三角線の中心にあたる所に、一基の石を乘せた古塚がある』

『塚？　……有つたかしら？　……そんなものが』

『塚は土饅頭に堆れ上つて、四方に大きな榛の木がそびえ、秋となると、鶏血草が血を流したやうに咲き出るので、藥園奉行や黒鍬の小者は、そこを、江戸城の血塚とよんで、足ぶみ禁斷の地としてあるといふ』

『まあ、そんなことまで誌してあるの？』

『場所が江戸城の奥のこと故、こゝまで突き止めた狛家の先代も、どうする事もできなかつたのでせう』

『だけれど、それも江戸城だけの傳説ぢやないかしら？』

『傳説かもしれません。おそらく現在の江戸城に棲むものは、何でそんな所に奇異な塚があるのか、疑つてみることも忘れてゐるのでせう。けれど、あながち世の傳説は、みな架空なりとも申されますまい』

『さうね、きつと、その塚かも分らない』

――暫くそこで言葉がとぎれる。

何か、帶を解くやうな音がする。そして、帳の蔭の灯が消えました。

『ぢやあ……ヨハン』

お蝶が立つて來るのかと、日本左衛門が身をすくめ込むと、

『お蝶様、聞くことを忘れてをりましたが』

『なアに』

それから、少し改まつたやうな、ヨハンの聲音でした。

『あなた様はこの樟板の一方を、一體、どこからお持ちになりましたか』

『日本左衛門に近づいて、やつとの思ひで手に入れて來たんだよ。……ヨハンや、お前はそれが何かふしぎなの？』

『いゝえ、不審とは存じませんが、あなた様は、秩父でも、この石牢へ來た時も、初めのうちはこのヨハンに向つて、こんな事を平氣で言つてをられました』

『どんなことを？』

『――私は日本左衛門が忘れられない……と』

『あゝ、私は、さう言つてゐた』

『あの男が戀しいと仰言やいました。あの男の妻になりたいとも言つたことがございます』

『ア、私は、さう言つたよ』

『では伺ひますが、あなた様は、今でもそのお心でございますか？』

お蝶は默りこみました。しばらく返辭が洩れません。

臆面なく、彼女が口にまで出してゐた戀が、嘘か眞か、といふ點は、今以てヨハンの氣がかりであるとみえます。

答へに窮したものか、お蝶は暫く默してをりましたが、

『……分らないわ、今の私には』

そして、ヨハンがまだ何か問ひ詰ようとする先に、暗の帳をふわりとあげて、ほの白い顏の端をのぞかせたかと思ひますと、

『私のすることを見て居ておくれ、永い目でとは言はないのよ、こゝ二晩か三晩のうちだから』

ヨハンは瞬目しながら十字を切つて、彼女の足元へ祈禱を投げました。

『お姫様！　あなたをお信じ申します』

――が、その途端に、彼女の白い腕はハラリと帳を落として、『ヨハンや、後を閉めておくれ』

鐵柵の一端に隙を作ると、猫のやうに身をすぼめて、音もなく外へ拔け出しました。

ハツとして、物蔭へ身を退きながら、息を殺した日本左衛門は、途端に目の前をス、と通つてゆくお蝶の影を見上げて、

『ウーム……』と思はず出る唸き聲が、唇を破りさうになる。

ヨハンの石室から出て來たお蝶は、前のお蝶の身裝とはまるで姿が變つてゐました。紫巾振袖の艶冶な色子すがたは、黒づくめの覆面と小袖の膝行袴にくるまれ、足さへわらじばきの輕々しい身ごしらへです。

飛鳥といふ形容は、それから刹那の先に見た、お蝶の行動にこそふさはしいことばでせう。

その足が、以前の塀際へ向つたかと思ひますと、すぐに姿は塀のミネに止まつて、椋の梢に白い手が伸びるや否、ちやうど黒猫が跳んで降りたやうに、大地へ降りた地ひびきもしない間に、彼女はもう山屋敷の外をスタ〳〵と向ふへ歩いてゐる。

長い高塀の角を横に曲がつて、切支丹屋敷の表門を過る頃から、さらにその足どりは加速度になつて、摺り足から小走りに、小走りから宙を飛ぶ如く變つて行く。

こんもりとした森と森の間を抜けると、俄に胸つきの急勾配になつて、やがて鼠坂を上りきると、また一方の森へはいる。

『はてな。どこへ行くのか?』と、後を慕つてゆく日本左衛門は、さながら彼女のために五里霧中を

引き廻されて居るやうな氣がしてゐます。

――すると、その足音を聞きとめたか、四方の樹の蔭から、ぼかと、四ツ五ツの提灯が螢のやうに飛び出して、それに幾人もの人影を加へ、ばら〳〵とお蝶の周圍に集まつて、來るのでした。

見ると、提灯には一つ〳〵、明らかに『御用』と記してありますから、さてはと、日本左衛門はギヨツとして笹むらの中へ身を伏せましたが、意外なことにはお蝶はすこしも驚いた樣子が見えない。

いや、驚かないばかりではありません。

『あら、梅市、安藏、そのほかみんな、山の者達ぢやないか、何しにこんな所へ來てゐるの?』

『ヨハン樣のお申し付けで、石神堂を見張つてゐるのでございます。どうやらこの間道は、誰やら一度通つたらしい形跡があるので』

『あるとすれば、何日ぞや私を追ひかけて來た、相良金吾かも知れない。先でも、この頃は薄々覺つてきたやうだからね』

『そこへ足を踏み込むのは、虎の穴へはいるのも同然で、ずゐぶん危なツかしい仕事だと思ひますが……』

寄り集まつた明りの中には、かの山岳切支丹族の人形師の梅市の顏や、蓑直しの安藏の顏などが、憂はしげに見出されました。

『あぶない事は、素足で双渡りをするやうなものさ。だけれど私は行かなければならない……もし、三日のうちに、こゝへ歸つて來なかつたら江戸城の土になつたものと思つておくれ』

『みんな！』

突然、梅市が『御用』と書いてある提灯の灯を消すと、一同もそれに慣つて、ふッ、ふッ、と一瞬のまに殘らず消して、彼の次のことばを森として待ちすくみます。

『――お姫樣のために、お祈禱をさゝげてくれ、これが、最後のお別れになるかも知れない。イヤ、そんなことのないやうに、夜光の短刀を抱いて、ふたゝびこゝへ歸つて來るお姿が見られるやうに、みんなして、お祈禱をあげようぜ』

ソロ〳〵とひざまづくと、一團の人影が、やゝ暫く、聲なく、身うごきなく、凝と首を垂れてゐる。

――その默禱をうけながらお蝶が一歩うしろへ退がつて、石神堂の扉をギイと押したかと思ひますと、掻き消すごとく、姿を堂の中へ隱しました。

カランと堂の中でひびいたのは、木棧の繩梯子でも空洞へ下したやうな木の音です。

醒めたる如く、それに首を上げた切支丹族の者たちは、火のない御用提灯をふところに疊んで何處ともなく立ち去りました。

後は、がうッ――と、空を翔ける春の木がらし。

御附外雜司ケ谷の藥草園、芝の魚籃坂における藥草園、小石川養生所の藥草園、かう三ケ所が幕府經營の城外藥園地でありました。

中で最も古いのは雜司ケ谷の西お藥園で、そこの奉行をかねながら、閑役の餘暇に本草の研究に沒頭してゐるのは小野曉臺といふ篤學な人です。

曉臺、今も屋敷の書齋にはいつて、何か虫蝕本をくりひろげてゐると、

『桃園の筑後守樣がお見えでございますが』

と、門人の取次でした。

中野桃園の人といへば新井白石です。近ごろ役を退いたとは聞いたが、あの權勢家が何しにこの藥園などへ訪れて來たのかといぶかしく思ひながら、取敢ず立つてゆくと、

『おゝ、曉臺殿、御無事か』

筑後は門外に籠を待たせて、もう式臺へ來てをります。

『おめづらしい事ではある。さあ、こちらへ』

自身案内に立つて書院へ通る。

久淵のあいさつが終つて、世情のうはさから、新將軍吉宗の人となり、或は、政治のこと、鳩巣、

徂徠學派の惡口など、それからそれへ話しが熟したころに至つて、

『時に、今日伺つたのは』

と初めて要件をもちだしました。

『なんぞ折入つたことでも？……』と曉臺も膝を改めます。

『ほかでもないが、近ごろ閑を得て、古書類を整理してをるうちに、御城内の人參畑にある血塚について、妙な記錄を見出したのでござるが、それについて、二三疑問の點を御垂示願ひたいと存じて、參つたわけでござるか』

『人參畑の藥園は、手前の祖父小野蘭岳のひらきましたもの故、聞き覺えもないではござりませぬ』

『そこの人參畑の血塚は、一體、德川御開府以前のものであらうか、以後であらうか』

『祖父の蘭岳が、お上の命をうけて、人參を移植いたした當時に、慶長甲寅といふ年號を刻した石がその塚より出たと申してをりましたが、何日かそれも埋沒して近頃では見當りませぬ』

『慶長の甲寅は十八年、大阪攻めを遊ばした冬の陣の當年で、神君の御發令により、大久保忠隣が京都の耶蘇教會堂を取り毀し、諸國に邪教禁止のおふれを布かれてから三四年後にあたる』

『塚もその當時に建てたものではあるまいかと心得ます』

『して、以來あの塚について、何か變つた話は殘つてをるまいか』

『と申せばあの塚の附近で、よく下役の耕作人が怪我をいたす事で、それと、秋になると、塚の周りに限つて、異な植物が芽を出します。またその草は蠻草であらうといふ想像のみで、祖父も父も名無し草としてをりました』

『ほう？』

『しかるに、數年前に、手前が長崎表へ公用で參りましたせつ、その捺草を所持いたして同地の蘭人に示して糺しましたところ、それは南蠻の地では、鷄血草とよぶ植物であると申すこと。……が然しどうして左樣な蠻地の野草が江戸城の奥庭などに咲き出るものか、その儀ばかりは、この曉臺にも、とんと想像が參りません』

『なる程、それで自分にもおよそながら綴りがついた。まだお上へ復命せぬうちは、ちと他言を憚るが、いづれ其許の御不審については、後日白石よりお話しいたすこともござらう』

彼は要件をすまして中野の隱邸へ歸りました。

當代の碩學を以て任じ、西洋紀聞の著者でもある彼は、吉宗から依頼された例の調べ事にかゝつて自身でも多少の興味をおぼえないではありません。

數日前から、諸書の記述や諸方の考證を蒐めた白石は、いよ〳〵案成つて、こゝに吉宗へ復命の筆をとり始めます。

――近ごろ、大奥にかしましい妖説は是か非か、江城の深秘、人参畑の血塚の眞相は何でありませうか。

蒐め得た考證を材料にして、彼の該博なあたまがその眞をどこまで突き究めたかは、最も興味ある問題で、將軍家でも首を長くして待ちあぐねてゐる所であります。

果して、白石の探究によつても、そこがピオの最期の地と見極めがつけば、ピオの通信が本國へ絶えた紀元千六百〇三年以來、ローマの人々が千里を遠しとせず探しぬいて來た王家世襲の寶刀、夜光の劍も、意外なところから、この世の朝光を浴びることになるかも知れません。

煙草色の船

そこは、城内御藥園の一部。

北の境から九十六歩、東の崖から四十四歩、三角線をゑがいて中心にあたる所、人参畑の血塚です。

四方をかこむは、高々とした榛の木で、赤い芽さしの淺く染られてゐるのみですから、梢を透いてあたる太陽の木漏れ陽は、地上に美しい光線の斑を描いて、あるかないか位な樹上の微風も、地に燦燦とうごいてゐる。

「ところで、他言を禁じるぞ」

かういつたのは若き吉宗、床几をすゑて、そこの野立をしてをります。

『はつ』とその左右、指先を土について、居流れたのは近側の旗本、土屋勘解由、水野彌一兵衛、庄司仙三郎、近藤幹雄、中坊陽之助、長坂血槍丸郎、本田龍平、かう七人で、吉宗の弓馬の相手に近ごろ選び出された倔强の者たちでした。

また一方には、黒鍬の小早川剛兵衛、小姓組の松平源次郎、頭をさげて森としてをります。

吉宗は平服、それも例の素服、旗本たちは稽古着を下にのぞかせ、いづれも、的場の弓からこつちへ立ち寄つた樣子に察しられる。

『突然、その方たちをこゝに集めて、塚をあばけと申せば、いかにも吉宗が怪を好むやに思ふであらうがこれには仔細があることぢや。源次郎、筑後守から參つた調べを一同に讀み聞かせてつかはせ』

命をうけて、松平源次郎は、默念と一禮して、ふところから一帖の綴ぢ物を取り出して讀む。

白石が復命した調べ書です。

――原文はあまり長きに失しますし、本篇の筋には關係のない部分もありますから、こゝに概要だけをつまんで申しませう。それはつまりピオの生涯記です。

耶蘇紀元一五九五年は、日本の文祿四年で――吉宗の代をさること百二十餘年前、羅馬の貴族ビオは、日本へ渡つた。

彼は、羅馬十二王家のうちの首座の家すぢであつた。しかもビオは、王家の世襲とする寶劍と『鷄血草』の種子だけを持つて、海を越えた。

その動機は、首都における王族間の内亂と、失戀であると想像される點があつた。

ビオは初め、天草支會に身を寄せて、やがて、普通の傳道者のやうに、京都へのぼつた。

それは、慶長八九年前後であつた。

當時は、秀吉歿後、いくらか、異教徒の往來もあり、傳道も默認されてゐた。ビオの目的は、關東京阪の貴顯の間にとり入つて、徐々と曙光を見、晩年には實行の端緒にはいつた。

天下は二勢力に分れてゐた。彼は大阪の秀頼の許しと、關東の大御所の印可とをあはせて得て、日本に一大耶蘇會堂をたてる目的の下に、地を搜すための旅に出た。

さういふ通信は、故國の王廳へも通じられてゐたから今迄にも明瞭である。彼が、不明の人となつたのは、慶長十七年、旅先で、不慮の禍に會つて、關東の山へ姿を隱してからであつた。

なぜ、ビオが山へ隱れたかといふと、當時すでに、關東大阪の交渉は風雲險惡になりはじめて來てその間に、やはり一人の耶蘇會の異國人が、密偵を働いて、關東の機密を、大阪へ通じた事件が發覺した。

その事件が關東方の神經を尖り立てゝゐた時なので、ビオも忽ち嫌疑をうけて、數多の刺客に狙はれた。

つづいて、關東の考將軍家康は、突然禁教令を發し、多くのばてれんを斬り、教會堂を毀し、年毎に迫害の度を强めた。

ビオの山嶽生活は知るよしもない。然し、彼は三年目に、もうほとぼりも冷めたらうといふ氣持からであらう、武藏の高麗村に姿をあらはした。

狛家の祖先は、彼を優遇した。

けれどビオはそこにも長く居られなかつた。忽ち、德川家の武士の知る所となつて、曠野から赤城の山へ走つたが、途中、安中の城下で井伊直政の家中の手に捕らはれてしまつた。

江戸城へ送られたその年が慶長十九年。ちやうど關東大阪手切れとなつて、大御所の息右大臣秀忠は、關東の兵をすぐつて大阪へ發向しようといふ間際であつた。

さういふ際であつたせゐか、ビオは深い吟味をうけた樣子もなく、出陣の血祭に、江戸城の庭で斬られたらしい。死骸は小者の手に渡つて、無雜作に埋けられた。また『慶長甲寅』の塚石は、その死骸を扱つた小者が、ビオの死後、その土壤から鷄血草が咲いた爲、迷信をおこして、病むものが多く

ひそかに計らつて建てたものであつた。

どうして、鶏血草がそこに咲くか、それは想像であるが、恐らく、ビオの所持してゐた種子が、ビオ自身の血汐を肥料として狂はしき鮮紅の葉を伸ばすのではあるまいか。

迷信は迷信を生む。以來、江戸城の三代、四代、五代、とかく奥庭で怪我をすると、塚のせゐにしたがつた。

……

白石一流の文章と引證で、つぶさに認めた書を讀み終ると、松平源次郎は目禮して、それをふところに納めました。

『以上、聞いたとほりな次第であるが、そこでちや』

と、吉宗は、ズウと一同の顏を見渡します。

『そこで……』と語をつづけた吉宗は、先頃から忌むべき噂にのぼつてゐる吹上の妖について、最後の斷案を下して言ひます。

『――察するところ、鼠賊、獵奇の輩など、夜行の鬼を躍らすものは、ビオと申す異國の貴人が地下に抱いてゐると傳へられる寶刀の爲す仕業と思ふ』

頭を垂れて聞き入つてゐた一同は、默然として頷き合ひました。微風にうごく梢の陽蔭は、幾つもの顏や肩や塚のあたりを陽炎のやうに浮遊して、その人々の視覺をもてあそんで居ります。

それから、どんな秘命が吉宗の口から出たものでせうか、やがて、旨を含んで、『はつ』と立つた一同は、黑鍬の剛兵衛を先にして、春秋百餘年の秘密をつゝむ血塚の地底をあばきにかゝりました。

まづ土饅頭の上の苔石は、剛兵衛とその下役の手によつて取のぞかれ、七人の旗本と、小姓の松平源次郎は、各々、鍬と鋤とを手にして、塚の周圍から圍陣になつて掘りはじめる。

太陽の下、振り下ろす鍬の下には、いかなる暗も秘密もつゝみ得ません。

七尺の地底――あばかれた白骨はそも何を齎すでせうか？

× × ×

夜になりました。

山里、吹山、船見山、嵐山、すべて寂とした暗の底に沈みこんで、春の星ばかりが、模糊として美しい。

ギイ……と石神堂の扉が開く。

白い顏の端が外の赤松の林をのぞきました。

お蝶です。――小石川の石神堂の穴から江戸城の秘孔を拔けて、そこに顏を出した彼女でした。

大丈夫――と見ると、お蝶の姿はむさゝびのやうに松林から船見山を越えて行きます。すると、すぐまたその後から、同じ石神堂を飛び出したのは、日本左衛門の憤怒に燃えてゐる姿です。

一陣、二陣、吹き去る風の靜寂に返るのを待つて、

「よからう！」

何處かで、かう言つた人聲がする。

――と共に、堂の裏手や、四方の木蔭などから、熊笹をザワつかせて、影を起した八九人の中に、松平源次郎と黒鍬組の剛兵衛の顏が見えました。

「早くいたせ、かういふ場合は神速でなくてはならん」

四五の人間は剛兵衛の使つてゐる黒鍬の男とみえて、彼がかう指圖をすると、「あつ」と答へながら堂の中へ飛び込み、間道へ通じるそこの床板を釘付けにし、さらに、堂の喜連格子も外から嚴重に釘を打つて、テコでも開かないやうにしてしまふ。

「これでよろしうございませうか」

見張に立つてゐた剛兵衛と源次郎は、一應、その入口をゆすぶつて試みながら、

「よし！」

そして、相顧みて、ニツコと笑ひ合ひました。

「かうしてしまへば、袋の鼠ぢや」

「では、手前は錦霜軒の方へ參りますから」

「御苦勞にぞんじます。後刻また……」と豫定のやうに、輕く左右へ別れてゆく。

松平源次郎はただ一人で、裏山づたひに、例の萬太郎主從が根城としてゐる錦霜軒の方へ足を運んでゐる。――刻限は、ちようど八ツか九ツ時分でせう、遙かな、本丸、二の丸の深殿の灯も消えて、富士見番所のお櫓の灯だけが宙にポツとにじんでゐます。

彼が、暫く附近に身を隱してゐると、やがて錦霜軒の戸があいて、例によつて身輕にいでたちをした萬太郎主從の影が、忍び足にそこを出て行かうとする氣配でした。

ばらつと、物蔭をとび出した源次郎は、不意に、二人の前にあらはれて、

「尾州樣、しばらくお止りを」

小膝を折つて、いんぎんに申します。

ぎよツとしたらしい萬太郎は、足をひいて、

「誰ぢや？」

と鋭い目を以て暗をさぐる。

「小姓番の松平源次郎にござります」

すかして見た彼の背丈や輪廓、ははア、さてはいつぞやの明け方、廣芝の先で、曲者と誤まつて組み仆した一方はこの男であるな――と思ひ當りましたが、萬太郎は空うそぶいて、

『なに、小姓番の松平源次郎と申すか。その源次郎が、何用があつてこゝへ參つた』

『お上の御口上をうけまして』

『ふーむ、この萬太郎に、將軍家から?』

『はい』

『何ぢや。承はらう』

『上意、戸外にては、申しあげかねます』

危げな沙汰とは思ひましたが、いつぞやの氣がかりもあり、將軍家の旨といへば、まさか、立話しにも聞かれません。

『こちらへ來い』

あゞで招いて、錦霜軒へ引つ返します。

先に戻つて、戸をあけた金吾は、さてこそ萬太郎の行爲がたゝつて、何か、尾州家に對する吉宗の凶命〝いよ〳〵やつて來たかと豫感をもちました。

銀泥のふすまに滅入りこむやうな灯が更けてをります。水の底かと思はれるばかり森とした木丸の深殿に、吉宗はまだ起きてゐる。

『お……參つたか』

音もなく開いた一方のふすま。

『はい、お供仕りました』

身を伏せたのは松平源次郎です。――それを目でうなづいて、

『尾州殿、私見でござる。昔の友として會ひませう、遠慮はいりませぬからどうぞこれへ』

かういつた吉宗のことばは、將軍家の格式をのぞいて、紀伊の息子である元に返つた口ぶりでした。

『では』と、源次郎のうしろから、つか〳〵とはいつて來た者は、何かお召といふので、錦霜軒から導かれて來た德川萬太郎で、それを見屆けた後、金吾は疊床から板廊下へ身を退きます。

『源次郎、遠慮いたせ』

吉宗は、顎で侍側を拂つておいて、ひとしほ懐しげにくだけました。

『お呼びしたのはほかでもないが、豐間、公の格式で會ふては、親しい話しもしにくいので、今夜は、すこし寛がうといふ所存……。時に、萬殿、お探し物は見當りましたかな』

過日の、廣芝の件は曖にも出さないで、眞つ向へかう探りを入れてみましたが萬太郎もこゝへ來る

間に、相當の應酬の用意をもつてゐたとみえ、
『いや、なか〳〵、雲をつかむに等しい手懸りで、何の端緒もつかめません。このあんばいでは、あるひは飛んだくたびれ儲けかも分らない』
何の前提もなく、彼の單刀直入に對して、こつちも底をぶちまけてしまひ、その後の空虛をふさぐ爲のやうに、ハ、、、、と音響の返る天井へ高い笑ひ聲を投げました。
『所が萬殿、偶然といはふか、けふ何心なく吹上を歩くうちに、この吉宗が、奇異な短刀を手に入れたのだか、鑑定をしていただけやうか』
『刀の鑑定は、たしか、そちらの方が先輩であつたと思ふ』
吉宗の皮肉を、萬太郎は逆手に出る。しかし、さすがの彼も、晝のうちにビオの遺蹟があばかれてゐるとは夢にも氣づきません。
『いや、それが目の屆かない品物、日本の鍛冶が打つた物なら、わざ〳〵其許をよぶこともないが、どうやら異國の短刀らしく思はれるので』
『異國の……』と、萬太郎は目を冴えさせて、『異國と申して、種々、明のものか、高麗のものか、あるひは呂宋刀でござりますか』
『何か分らぬが、短劍ぢや、柄は夜光珠にちりばめられ、なかごは直身、切羽の上に象嵌がある、眼

をこらしてよく見ると、青金、赤金、黃金の三色の金であらはした南歐の少女の顏が浮いてゐる』
『おつ……』
『御記憶があるか』
無いとはいへません、夜光の短刀！　萬太郎は彼に對する意地も忘れて、思はず膝を乘り出させる。
『見せてください！　その短刀を』
『見てもらはうと思つて呼んだこと。さ、こちらに置いてあるから、御案内申さう』
吉宗は先に立つて、サツと廊下を開けましたが、そこに、うづくまつてゐる人影を見て、
『何者ぢやツ』
と、將軍家らしい威嚴をもつて叱りつけます。
萬太郎は彼のうしろに從いて來て、
『あ、それは手前の家臣です』
『なに、萬殿の家來とか』
『相良金吾と申します』
『主人思ひなやつ、叱つて、氣の毒であつた』

白い足袋の裏が鏡のやうな大廊下をそのまゝ踏んでゆく。

その姿を遙かに過して、金吾は竦む足をしづかに急がせました。——何ともふしぎな吉宗の話、主人の身も氣づかはれてならない。

と——先に行つた吉宗は、鐵のやうに厚い檜の階段を踏んで、本丸の望樓に上つたやうです。

金吾は、それ以上に進み得ず、望樓の下に身を屈めて、ひたすら事なきことを祈つてをりましたが、この深夜に、將軍家自身が望樓の上に萬太郎を誘つて行くなどといふ行動は、何としても腑に落ちません。

『もしや？……』彼の想像は彼の肉と血を凍るやうにひきしめました。吉宗は、望樓の上に刺客を伏せて、主人を亡いものにしようといふのではあるまいか？

さういふ例が、支那の歴史などにも無いとはいへない。天下の大統をうけついだ吉宗にとつて、萬太郎の存在は、決して快いものでないことは分り過ぎてをります。

案じる程のものではありません、上を見ない金吾の杞憂は、あまりにも主人思ひな、思ひ過ごしです。

吉宗に導かれて、望樓の上へあがつた萬太郎は、太い柱のみで、四壁のない檜の床に立つと共に、

その一方の柱の下に、一灯の明りと、一個の壺と、一個の壇とが、星でも祭るやうに据てあるのに目をとめました。

『何であらう？　あれは』

『白骨を祭つてあるのです』

と、吉宗は微笑をふくむ。

白骨——と聞いて萬太郎は、何とはなく霧でも吹かれたやうな寒さを感じました。寥々とした星ばかりならいゝが、消えなんとする燈心の細い焔が、いやな陰氣の這ひ廻るのを目に見せます。

萬太郎はいぶかしげに、また、ことばかず少く。

『白骨……誰の白骨？』

『白骨に名はございぬ。想像で申さうならば、羅馬の貴人、ピオのであらうか』

『……』

初めて彼は、こゝに至つて、吉宗がいつか自分の目的を知り、その目的の線を越して、鼻をあかせてみせるのかと氣づいたらしく、口を緘して、彼の横顔をちらと睨めました。

『塚をあばいた時は、その土を祭るものぢやさうな。で、一緒に出た夜光珠の短刀と共に、こゝに、かうして靈を祭つておいた』

いはれて、彼がふと見ると、なる程、白骨の壺のそばに、白絹をもつて包んだ横笛ぐらゐな長さのものがおいてある。

初めは、左までゝなかつた萬太郎も、その白絹に包まれたものを思ふと、矢も楯もなく、吉宗をつきたふしても、それを奪つて、天へかけ去りたいやうな衝動を抑へきれませんでした。

だが、相手はかうしておれの羨望をながめてひとりで愉悦を感じてゐるのだ、と心づくと、彼の氣性は、意地でもそれを見たいなどといふ氣振を出させない。

「それは飛んだお拾ひ物だ」

かういつて、苦ツぽい笑をかすめたのみです。

「どうぢや、手に取つて一見されては」

「そのうち、畫でも、ゆるりと拜見いたしませう」

「左樣――この暗では、奇異な裝劍も、切羽の象嵌も、よく見ることはできなからう。おう、時に萬殿、何刻であらう」

今度はふいと話しを更へて、望樓の欄から北斗の位置を仰ぎました。

「何せい、だいぶ更けましたな」

「もう見えてもよい時分だが……」

「え、何が？」と問ひかけて、萬太郎は理由のない後悔を輕くおぼえる。

「見えるであらう。吹上の奥が。――いや見えるといつても、黑い樹木と、黑い山と、そしてあとは星明りに光る流れの水が分るのみだが、やがてあの邊に見えて參る」

再度、何がといつてたづねたい所を、默つて聞いてをりますと、吉宗も口をつぐんで、根氣よく西北の暗を見つめてゐます。

ふと、萬太郎が顏を上げたのは、流れ星に目をひかれたのでした。然し、吉宗は眼たゝきもしません、心耳をすまして、吹上の暗と對峙してゐる。

四半刻もたつたでせうか、さうして、二人は無言のまゝ、望樓の欄に手をかけてゐましたが、なんの別條もあらはれない。

「さて、どうしたであらうか、こんなはずは無いのだが……」と吉宗はつぶやきながら、

「萬殿、今宵はこゝで、白骨の通夜をなさらぬか」

と、すゑてある床几へ腰をおろします。

元より、萬太郎とても、このまゝ吉宗に愚弄されたやうな形では寢つけない。殊にまだ、吹上の方に、何か見えて來るはずだといつた彼の言が、うはべにこそ出しませんが、心の裡では氣にかゝつてゐる。

『望樓の通夜は風變りぢや。春のこと故、風邪もひきますまい、おつきあひするといたさう』

彼とならんで、同じ角度に胸を反り、床几に體をあづけますと、

『いや〳〵、萬殿の體は、風にも夜露にも、だいぶお馴れになつて居らう』

またしても吉宗が、ちくりと刺すやうなことばでしたが、それに不快を抱いてゐるまもなく、

『あつ！　あの火？』

と、萬太郎の瞠つた眼は、吹上の暗の一方へ、何のためらひもなく奪はれてしまひました。

――お蝶、お蝶、お蝶、お蝶。

お蝶のかげを追ひ慕つて、吹上の丘を越えつめぐりつ、日本左衛門は息をきりました。

彼女の今夜の敏捷なことは、曾つて、小佛の甘酒茶屋から暗夜の險路を追つて行つたその夜の迅さにも劣りません。

殊には、幾夜となく、探り歩き、さまよひ廻つてゐる所なので、深山大澤を思はすやうな吹上の道の曲折も、自分の庭を歩くやうに、忽ち例のお藥園まで、迷ひもなく驅けつけました。

ヨハンがいつた人參畑――、繼ぎ合せた樟板の繪圖によつて明確に敎へられたビオの遺蹟はそこの血塚！

場所が分つても、その地底を見るには、幾尺の土を掘る努力がいるだらうとか、または、ビオの遺物死體があつた場合も、それが石棺にはいつて居たらどうしようとか、そんな場合の第二策は、彼女の念頭にありません。

『夜光の短刀は、もうわたしのものだ！』

歡喜のほかは何ものも無い、希望のほかに何物も持たない、一念一圖のお蝶であります。

その懸命は彼女をして、彼女が生れて初めて知る、熱と大膽をもたせました。

パリツと響いたのは枯木の柵です、いつもは息さへ殺して歩くのに、もう、夜光の短刀はあそこにある、餘人に先を越されてはならない、さういふ性急に張りつめてゐるお蝶は、美しい猛獸のやうに、何ものも破る勢ひで、一瞬の刻をもそこへ焦心ツたのです。

『――攫はれてならうか、夜光の短刀。こゝまで事を漕ぎつけて來ながら、日本左衛門ともあらうものが、お蝶のやうな小娘づれに、横奪りされたと言はれちやあ、末世末代、綠林仲間の笑はれぐさ』

彼はさすがに音もさせず、柵を躍つて越えますと、すばやく藥草畑を走つて、榛の木蔭へ身を入れました。

青い星明りの下、お蝶は、ほつと息をついてゐる。

息を休めながら、彼女の鋭い目くばりは始まりました。そして彼方、此方と、しきりと探し歩くう

ちに、書間、吉宗が旗本たちにあばかせた血塚の前でハタと足を止めると、

『オ、、これだ……これにちがひない』と呟やきました。

見ると、夏草の伸びる頃には、その中に隠れてしまひさうな低い塚石がある。が、ふしぎなのは、その日の晝、鍬を入れた形跡もなく、踏みにじつた痕も消えて、やはらかい枯れ草と山芝が少しの不自然もなく土をかくしてゐることです。

然し、元よりお蝶は何事も知りません、確かにそれ！　と飛びつくやうに寄つて、石の肩を抱くやうに手をかけました。どうしてこの石の下を探つたものかと、そこで思案につき當つたものか、この石こそ血をうけた祖先の姿かと懐しく思つたものか、とにかく、暫くさうしてをりましたが、やがてその手が石の抵抗を試みるやうに、力をこめて向ふへ押す。

案外にも、据ゑられてある石の根はもろく動いて、どろッと向ふへ倒れましたが――と思つた途端です、

『お蝶ッ！』

榛の木立から、叫んだ日本左衛門が、餌に飛びかゝる豹のやうに、彼女の姿を目がけて身を躍らせました。

どんな激情もめッたに顔に出さない彼が、さう叫んだ形相と怖しい勢ひといつたら、かつて見ない

程でしたが、その瞬間に、何といふことでせう、彼の目の前――およそ七尺四方ほどの大地が、ザツ――と突然くづれ込んで、眞暗な巨口を開いたかと思ひますと、お蝶の姿も倒れた石も、せつなに地上から消えてをります。

『やつ、これは？』

と、すんでのことに、彼もその陥穽に自から飛びこむ彈みだつたのを、ハツとして足を食ひ止めましたが、濛々とあがつた砂塵と驚愕に、中をのぞく隙もなく、

『曲者！』

四方の暗を破つて、彼一身をばら〳〵ッと取り圍んだ數人の武士がある――それは吉宗の旨をうけて、宵からこゝに手ぐすねひいてゐた、長坂、近藤、中坊、本田、そのほか倔強な旗本七名でした。

驚愕に重なる驚愕、意外にかさなる意外な強敵の計策です。――危地に墜ちたお蝶、重圍にかこまれた、日本左衛門、あゝ遂に夜光珠の夢は慘澹たる破れをこゝに告げました。

どう遁れませう、この陥穽を。

合圖はさかんに火を呼びました。木魂をしてひびく呼子笛につれて、あなたの樹林やこなたの山藪から、狐火のごとく刹到するのは、番士や黒鍬の者の手に振る明りです。

望樓の上で萬太郎が、アッと驚いたのはこの火光のうごいた刹那でした。

それと共に側にゐる吉宗の片頬にニッとゆがむ北叟笑みが、目に見えるやうな氣がします。

蹄音にハッと蹄音。

知らせにつぐ何かの報告。

やがて集まる提灯や雪洞の明りは、下から逆しまに望樓の柱を染めました。

とん〳〵〳〵とそこへ誰やら驅け上つて來る。

きつと、吉宗が振返つてみますと、革襠股立ちのまゝ、旗本の中坊陽之助がそこに小膝を折つて、

『捕り押へました曲者、かねてのお指圖どほり、ただ今不淨駕籠にのせて、平河口から宗門役人の手へさし渡しまするが、それにてよろしうございませうか』

『一人か？　曲者は』

『もう一名のものは、なか〳〵手强く、後より加勢をやつて追ひ詰てをりますから、程なく縛に就てくることゝ存じます』

吉宗と萬太郎が、やがて望樓を降りてゆきますと、今しも、一挺の不淨駕籠は江戸城の番士に固められて、平河口へ送られようとする矢先でした。

見ると、その中には、黑裝束を剝がれた、一人の女が、高手小手に縛しめられて、息さへあるかないかの樣子、苦悶の白いうなだれ顏へ、ガクリと黑髮をくづしてゐる。

『若殿』

そッと袖をひいて知らせる金吾に、返辭もなく、萬太郎は、

『ウーム、お蝶だ……』

茫然たるばかりでした。

『萬殿、曲者は法によつて、役人の手に處分を委すが、それで御異存はなからうな』

吉宗のことばのうちに、すでに中坊陽之助は先に立つて、縛についた切支丹のお蝶を本丸から不淨門へと運び去つて行く。

然し、吉宗はまだ寢所へは戻りません。武者溜りとよぶ望樓下の大床の間に床几をすゑて、次々に來る、吹上の報告を待つてゐます。

すでに四更を感じる時刻です。

一番鷄がどこかで鳴く。

『どこに姿を隱したものか、日本左衛門の姿は一向見當りませぬ』

――最後の報告は吉宗を失望させました。然し、石神堂の間道もあのとほり塞がせてありますから彼に翼のない以上、ふたゝび江戸城の外へ逃げ出す氣づかひは絕對にない。

彼は、注進の侍に、わざと聲を激しくして、
『腑甲斐ない旗本共である、水野彌一兵衛は何をしてをる、長坂血槍九郎はをらぬのか、土屋、本田、近藤のともがら、常に武をほこる者たちが寄つて、ただ一人の鼠賊を捕へ得ぬと云ふ法やある。早く行つてさう申せ、そち達の手や才覺にあまるならば、自身吉宗が出向くであらうと』
言はず語らず、萬太郎をそばに据置いて、手嚴しく懲しめてゐる吉宗は、この機に峻嚴たる彼の半面を見せました。
注進の者は、將軍家の叱咤に會つて、ハッと恐れ驚いたまゝ吹上の方へ引返して行きましたが、その後の白け渡つた無言の行が、刻一刻と過ぎてゆくうちに、不意な方角で、バリバリッといふ物音がひびきました。
『やつ？……』
ひとしく、吉宗や萬太郎の眼は、望樓の上へつり上りました。早、曉に近い靜寂を破つて、異樣な音がきこえた所は、たしかに高い樓上に違ひありません。
一同の胸に、何か知らず、ハッと不意を衝かれたやうな狼狽が走つた途端です——
『御免！』
と叫びながら、將軍家と萬太郎のうしろから、袴の股立を引ッからげて、櫓の階段を驅けのぼッて行つたのは、相良金吾でありました。

『ヤ、ヤ、？……あの音』
つづいて、將軍家も床几を立つ。
萬太郎も邊りの動搖につり込まれずには居られません、素破と立つて、言ひ合せた如く、金吾のあとから望樓へ向つて驅け上る。
眞つ先に、その頂きに驅けつけて來た金吾は、そこに立つ突嗟に、實に驚くべき不敵者を見ました。
何處を何う逃げて、どこから此處へ傳はつて來たものでせうか、まさしく、そこに立つてゐた人影は日本左衛門です！　ビオの白骨の祭られてある白木の壇から、夜光の短刀をつかみ取つて去らうとする刹那に、天運の盡きるところか、黑衣の袖を白木の臺の端に引ッかけて、それをたふした樣子です。
『オ、、おのれッ』
叫ぶが早いか、金吾がパッと飛びかゝッて行きますと、突嗟に身を沈めて、相手の體を泳がせた日本左衛門は、白絹にくるんだまゝの短刀を、牙の如く口にくはへて欄にヒラリと足をかけると、
『めづらしいな！　金吾』

「おぼえて居ッたか、日本左衛門」
「オ、夜が明けさうだ。――おさらばだぜ」
「待てッ」
「おれの年貢の納め時は、まだちッと早さうだ」
言ふかと思ひますと、望楼の一角の柱をすべッて、四層目の廂まで、スル〳〵と、蜘蛛のやうに辷ッて行きました。

あッ！　何たる離れ業でせう。
そこで一つよろめけば、四重層から櫓下まで落ちて微塵となる五體を、突嗟、猫足のごとく納めたかと思ひますと、日本左衛門の影は風を割ッて、扇廂の腕木から天主番役所の屋根の一端へと、ヒラリと躍つてをりました。
「今だッ」
逃がしてなりませうか、相良金吾として、與へられたこの再會を逸して、ふた〻びこんな機會といふものが巡ッて來るかどうか分りません。
無論のこと、彼もつづく。

豹躍！　また豹躍！
先の影は、すでに天主番長屋から銅塀のミネへ移つて、本丸の大屋根へと必死によぢ登つてゐるのです。
「あれよ！」
思はず叫んだのは、望楼の上の吉宗と萬太郎でした。
天地は曉闇。
遠い辰巳の海の境が、かすかに曙いろの一線をひいてゐるばかり。
そこから見れば、目の下は、御本丸大奥から大本丸の表方まで、海のごとき甍の波です。萬餘の坪もあらうかと思はれるこの大屋根、天下、こ〻より壯觀な屋根といふものは有りますまい。
甍は露に濡れてゐて、徐々に白む曉闇の明りが、そこを、脱兎と驅ける一人の男をあざやかに見せてゐる。
われを忘れた吉宗は、欄を打つて側にゐる松平源次郎に叱咤しました。
「助勢をよべ！　旗本どもを呼び返せッ」――と。
然し、こ〻に至つて萬太郎は、や〻自分の立場を盛り返しました。彼は溜飲をさげつ〻それをかう言つて制したのです。

『あいや、あまりお騒ぎなさらぬ方が得策でせう、かりそめにも天下の首城が、一盗賊に足痕を印された事さへ名譽ではありません。まして、あなたが大統をうけて以來日も淺いうちに、かやうなことが華やかに世間の語り草となつては、新將軍のかないへの輕重を問はんとする者がないとも言へません

——まづ何うなるか、愚臣金吾にまかせてお置きなさいまし、金吾が追つて參りました』

さうです。彼は金吾に手がらをさせたい。この機會を完全に、金吾ひとりの力に授けてやりたい。

——でなければ、よひのうちから隨分と吉宗に醜弄されてゐた自分の鬱勃もやり場がありません。

吉宗の聰明は、たやすく彼のことばをうけ容れて、

『ウーム、それもさうか』

無言と冷靜の佇立に返りました。

されば、日本左衛門を追つて行つた金吾には、彼ひとりの宿怨のほかに、『どうかやツてくれ、吉宗に見せてくれ、頼むぞ』と望樓の上で力こぶを入れてゐる主人の期待が多大にかけられてゐる。

元より金吾も怯みません。

彼が本丸の屋根によぢれば、金吾もすばやく大屋根にのぼつて、彼と十二三間の間隔を、一跳、一歩にちぢめてゆく。

四方へ富士形にながれてゐる屋根勾配は、追はるゝ者と追ふものとの影を、見え隠れにさせました

が、やがて、表方の方へ、坂を下るやうに走つた日本左衛門は、さすがに少し、その方角にも迷つたのでせう、車寄の破風から足を回して、ふたゝび大屋根の淺瀬を驅けながら、當番所、納戸前、御臺所の上まで傳はつて來ますと、御廣敷の橋廊下といふ屈强な渡りを見つけて、二の丸御門につづくお留守居部屋と賄ひ方の屋根をふみこえて走りつづける。

そこまで來ると、もう目の下に水が見えます。平河門、三の丸、丑寅櫓のかう三ツで、カギの手を作つた内濠の水です。

『しめた！』

彼の心は叫んだでせう。

初めてそこで、ヒラリと大地へ降りました。ちやうど梅林門の地先です。

土をふむが早いか、彼はさらに自由な足どりで、梅林櫓の芝土手へ向つて疾風のごとく驅けだして行く。ただし、そこにはお手先番所と進物番の寢小屋がありますが、彼の目にはそんなものは、脱兎の前の枯れ草にも足りません。

番所の間を驅けぬけて、小松の植ゑられてある芝土手へかゝると、夜光の短刀は突嗟にかれのふところが呑む。

逃げて來た道は誤りません、およそ江戸城の十重廿重のかこみから出るにはこゝよりほかに逃げ口

はない。なぜといへば、この梅林檜の土手から水の彼方の竹橋御門の間にかぎツて、幅は廣いが、濠は一重になつてゐます。

が然し――彼がそこから躍らうとしたせつなには、金吾もすでに、彼の姿をそこに見つけて、

『おのれ――ッ』

疾呼して日本左衛門を捕へました。

どぶ――ん……と凄まじい水煙りを、曉闇濠の水面に見たのは、まさしくさうした途端であつて、本丸の望樓に身伸びをして見つめてゐた吉宗と萬太郎のひとみには、もうその影が二つとも、一沫の白いものとなつて消えてゐました。

時ならぬ水煙りです。しかもまだ薄ぐらい明け方。

そこへわら〳〵と飛んで來た人數は、折よく竹橋御門の外を通りかゝつた宗門奉行井上河内守とその配下でした。

忽ち、濠の水面へ、分銅縄が飛ぶ、刺叉がさぐる。さうして、組み合つたまゝの二つの人體を、陸へ引揚げました。

金吾と日本左衛門です、二人ともに氣を失つてゐる、そしてぬれしづくな亂髪と、蒼白になつた顏

や腕の傷を見ますと、二人がいかにはげしい水中の搏闘をやつたかが想像されて、見るものゝ眼を慄然とさせる。

來合せた井上河内守は、この遭遇が、折よくもあり折悪くもありました。なぜかといふに、彼は前日から命をうけて、切支丹屋敷のお蝶の體を、平河口の不淨門でうけとることになつてゐました。

この未明に、早出のくり出しはそのためです。しかし、そこで約半刻ほどの時間を費してしまつたのは、事情まつたくやむを得ないと言はなければなりません。

× × ×

それより少し前に、中坊陽之助を先にたてゝ、本丸を出たお蝶の不淨駕が、平河口の犬くぐりから外濠へ來たのは、まだ人の顔もさだかに見えない頃でした。

『まだ宗門方の者は來てをらぬやうだ、約束よりは、少しこつちの方が時刻が早かつたかも知れぬ』

陽之助は、外濠の番小屋の前に駕をおろさせて、明けの空と四方の暗を等分に見交してをりましたが、向ふの木立に、チラ、チラ、とうごく提灯の幾つかを見たので、

『おう、あれへ來た』

と自分からも提灯を振つて、早くと合圖を送りました。

すると、さしまねく灯に應じて、足なみシト〳〵と近づいて來たのは、宗門役所の印をつけた幾ツ

もの提灯と、菌を植ゑならべたやうな菅笠の一列で、いづれも露よけの合羽に、あられ小紋の脚絆、どろ〳〵と地上に指先をついて屈みこむと、

『昨日の御飛札により、井上河内守の名代として、山屋敷與力佐脇仙十郎、お蝶の身から受取りに參上いたしました』

と、列の中から一人の武士が、かう言ひながらいんぎんに、中坊陽之助に會釋をしました。

『大儀でござる。――が然し、河内殿御自身は？』

『病中のため、御舎弟主水殿をあれに付き添はせましてござります』

『ウム、御風邪のことは前日承つてをつたが、大事な囚人、ずゐぶん手落のないやうに召され、何かの處置は、追つてお沙汰が下るであらう』

『では、たしかに』

『御苦勞でした』

お蝶の體は、繩のまゝ駕付きで差渡しになる。

で、陽之助は役目が濟んだわけですから、平河口から城内へ引つ返しましたが、こゝに奇怪きはまる事には、それから約半刻を經て、ふたゝび平河口へお蝶をうけ取りに來た人數があります。

それが僞物か前のが僞物か、宗門方と陽之助の間に、目まぐるしい紛爭がありましたが、ともあれ

一騎の使を山屋敷へ飛ばせてみると、お蝶の駕は着いてゐません。

落度の爭ひは後のこと、さては前の一列こそ、何者か企らんだ僞役にちがひないと、中坊陽之助と宗門方の役人は、八方行方をさがし求めて、その追跡にあせりましたが、江戸三十六見付、何の手懸りもありません。

その早朝、根岸の里にも飛報がありました。

息をきつて知らせに來たのは、この四五日、こゝへも歸らなかつた高麗村の次郎で、

『おりんさん、おりんさん、お嬢樣はどうしたい？』

と、聲の有りツたけを出して、今起きたばかりの耳を驚かしました。

緣先で、小鳥の摺餌を作つてゐたおりんと、庭先の吹井戸で髮をなでてゐた月江は、

『まあ……』と、兩方から彼の突拍子もない現れに目をみはつて、

『次郎ぢやありませんか、どうしたの？』

『あ、お嬢樣ですか、どうもかうもありません、早く支度をして、私と一緒に、お堀端まで來てください』

『お濠端へ？　何をしに』

「くはしいことは話してゐられませんが、何しろ、大變なさわぎ、あの、日本左衛門がネお嬢様、天運つきて、遂々縄にかゝつたんです」

「えつ、ほ、ほんとかえ次郎」

「ほんとですとも！」

「何時？」

「けふの明け方——たつた今です。だが、もつと驚くことがありますよ、その日本左衛門を捕まへるために、金吾様も組みついたまゝ濠に落ちて、氣を失つたまゝどうしても息を吹つ返さないと騒いでゐました。——で私が來る時に、御城内から寫太郎様も驅けつけて來たり、釘勘のをぢさんも飛んで行きましたが、何しろ早く、私はお嬢様にこのことを知らせようと思つて、息をきつて飛んで來たんです」

おりんは鳥籠をはふり出して、奥の塗簞笥から月江の帶や衣類を亂れ籠にもいれずにかゝへて來ました。

「さ、お嬢様、こゝで次郎の話を聞いてゐるより、少しも早くそこへおいでになるのが肝腎でございませう、お支度を遊ばせ、早く、早く」

「おりんや、着物などはこれでいゝよ、それより早く、駕を頼んで來ておくれ」

「おつと！　駕ならば、おりんさんのと都合二挺、こゝへ來るついでに連れて來てあります」

「ちや、私の護り刀を」

「ハイ」

「それと、お祖父様の紙位牌を」

「ハイ、ハイ」と、おりんはくる〳〵舞をして、彼女と自分の草履を二足、庭の沓石へ移しました。裏門の木戸から、兩女が乘物に身を入れると、次郎は例の野槍を小脇にかゝへて、月江の駕わきに付きながら、

「ねえ、お嬢様」

タツタ、タツタと、駕屋の足と速度を合せて驅けながら、中の月江に話しかけます。

「ねエ、お嬢様、うれしいでせう」

「私は、何だか胸がワク〳〵して、嬉しいのだか、悲しいのだか分らない」

「金吾様は、そのまゝ死んでしまひはしないかと、それを心配してゐるのでせう。……だが、それは大丈夫ですよ、水を飲んだゞけですから」

「私は、駕の中で、今もじいつと祈つてゐるんだよ」

「だが、胸が晴々するぢやありませんか。御隱家様を斬つた日本左衛門が、やがて、獄門に首をさら

すんだと思ふと、仇を討つたやうな氣がします』
『やはり、お祖父様が、金吾様の蔭身について守つてゐて下すつたんだね』
『さうかも知れません、金吾様は、今にお鍬様のお聟様になるお方ですから』
『何をいふの、次郎は』
『ホイー　また石のやつに躓きました』
喋舌つてゐると、道の遠さも分りません。
汗をしぼつた二挺の駕は、またゝく間に神田橋から外濠に沿つて、金吾と日本左衛門が引き上げられた場所まで驅けつけました。
だが、そこに矢立と手帖を持つて立つてゐたのは、大番組の侍四五名と、町奉行の與力同心と、外濠の番小屋の小者や仲間などで、もう金吾も見えなければ、日本左衛門も倒れてをりませんでした。
『もし、お伺ひいたしますが、これにをりました釘勘といふ目明しと、德川萬太郎様たちは、どちらへお移りになつたでせうか』
次郎がその内の一名にかう尋ねてみますと、
『オ、、そちは、萬太郎様の召使か』
『はい、召使でもございませんが、日本左衛門と一緒に、お上の御介抱をうけました相良金吾様に會ひたいお人がございますので』
『それならば、吳服橋御門内の南町奉行のお役宅へ伺つてみるがいゝ』
『有難うぞんじます……。お嬢様、聞いたでせう』
駕の中へかういふと、次郎はまた先に立つて、飽もせずに驅けだしました。
吳服橋門内の役宅では、その日の早朝から總出役で、奉行所始まつて以來の物々しさと混雜を呈してをります。
假吟味の準備のために、與力や同心が狂奔するかたはらには、奉行中山出雲守が三家の若殿萬太郎が不時の訪れに、その應接にも狼狽し、一方、役宅へ運び入れた日本左衛門と金吾とには、養生所のお抱へ醫小川笙船がかけつけて、その手當にもいそがしい。
折も折です。
そのただならぬ混雜のところへ、また新しい入牢が三人、釘勘の組のものに繩尻をとられて、珠數つなぎに門内へはいつて來ました。
見ると、鼠木綿の宗服を着たのが、虛無僧とみえますが、繩をうけた以上、無論、掛絡も天蓋も剝ぎとられてゐるので顏はさらしてゐる。

それは、雲霧の仁三と四ツ目屋の新助で、一番どんじりに、居所の羊のやうに引つ張られて來たのはお人好の率八です。

『入牢です。入牢です』――釘勘の組のものは、揚屋の境でしきりと怒鳴つてをりましたが、右往左往のとりこみかたで、暫くそこで身動きもなりません。

『あつ、親分……』

と、率八が、右側の板じきの上に、醫者の手當をうけて仰臥してゐた日本左衛門を見て、いと悲しげに叫びました。

『おう、率八か』

日本左衛門も氣がついて、ガバと向ふで身を起しながら、

『や、雲霧も四ツ目屋もか』

『親分……』涼しさうに二人は目禮して、

『遂々、來る時節がやつてまゐりました。小塚ッ原へ着くまでは、どうかお達者でお暮らしなさいまし。いづれ、お話は獄門の上で寢もの語りにいたしませう』

『ばかを言へ、おれはまだもう少し生きのびるつもりだ。いろ〳〵婆婆に未練があつて、どうもこのまゝぢや往生ができねえ』

かう言つて、ニッと笑ふと、聞きつけた同心が驅けて來て『これッ』と雙方を裂いて、引つ立てました。

果して日本左衛門の放言は、後日、うそでなかつた證據を見せました。やがて揚屋入となつた吟味中に、かれは四五度破牢をくはだてましたが成功せず、遂に、あしたは小塚ッ原の露となるにきまつた前の夜、嵐に乘じて牢舍の天井を破り、白雨黑風の夜を衝いていづこともなく消えうせました。

そして、紫紐の丹三、赤星重兵衛などと、第二の綠林の徒を糾合して、東海に白浪の惡名をほしいまゝにしたのは、それから彼が廿九歲に刑刀をうけるまでの短生涯の話で、こゝでは語る時機ではありません。

一方――金吾の方は、充分手あつい介抱をうけ、根岸から急いで來た月江や次郎も、共々、その枕邊に寄つて、あらゆる心づくしを捧げてゐる。

所へ、桐畑の自宅から、釘勘の手へ一通の手紙が屆きました。邊りの者が立つた時、彼は金吾の手へそッとそれを見せて、

『金吾さん、あとでよく讀んでください、お糸も遂々、自分で身の處置をつけました。――鎌倉へ行つて松ケ岡(尼僧院)へはいるさうです。あそこへ驅け込めば、どんな凶狀のある女でも、決してお上では手をつけません』

さうかうしてゐる間にも、奥へは、頻々と、江戸の四方の番所や諜者からの密報がはいつて來る。

『釘勘、やつと目ぼしがついたぞ』

出雲守と對談してゐた萬太郎は、やがて明るい顏をして、月江や金吾に何か言ひおくと、凛然として奉行所の外へ出ました。

凛然です。まつたく凛然です、彼は釘勘と共に、奉行所の前の石豆腐(差入茶屋)で輕い旅支度をすると共に、遠く江戸を離れたのです。

いや、病氣といふものほど怖しいものはありません、彼の持まへの獵奇病は、この最後に至つてもお蝶の先途を見屆けないでは、まだ何か宿題が殘つてゐるやうな氣がして、なんとも氣が濟まなかつたものと見えます。

× × × ×

中仙道から北國路、善光寺平も過ました。道中は、加賀の藩のさる貴人といふふれ込みで、前田家の闘手形も持つてゐる。その、菅笠合羽の一行が、ひとりの美少女を駕にのせて、急いだ早さといつたらありません。

これなん實は山岳切支丹族の變裝でした。救はれたのがお蝶であることは申すまでもないこと。

ヨハンは山屋敷の石牢で自殺しました。前の夜、事の破れたのを知つたからです。そして、彼女はヨハンの遺命によつて、その行くところへ運ばれてゐるのです。

眞ッ青な北越の海が目の前にひらけました。沖に、煙草色の帆を張つた、一艘の南蠻船がかゝつてゐる。

敦賀津の港でもありません、三國港でもありません、甚だ漠としてゐますが、確かにあの邊の海濱です、煙草色の帆を張つた南蠻ぶねは、お蝶をのせて白い海波の果に消えたのです。——それを見送つてから、山岳切支丹族のともがらも、祈禱の後に、附近の山へちり〴〵ばら〴〵蜘蛛の子のやうに立ち去りました。

『どうだ釘勘、追ひかけては』

『ウーム、もう目明しの繩ぢや屆きません』

『だが、ふしぎにわしは氣が輕くなつた。もう夜光の短刀も欲しうない。歸りにはひとつ、信州路の大名を訪ねて、何かまた、タネになるやうな秘密を拾つてやらうか』

『およしなさいまし、また三年も苦勞をしちや、あなたはともかく、この釘勘がたまりません』

砂山の砂をくづしながら、ふたりの旅人は、その晩の宿をさがしに歸りました。

(をはり)

昭和七年八月五日印刷
昭和七年八月十日發行

吉川英治全集　第十四卷

第十一回配本）

著者　吉川英治
發行者　下中彌三郎　東京市日本橋區吳服橋三ノ五
印刷者　關口一男　東京市日本橋區吳服橋三ノ五

發行所　東京市日本橋區吳服橋三ノ五　株式會社　平凡社
振替東京二九六三九番
電話日本橋二二一五五五七九八番

協營社組版・共同印刷株式會社印刷

終